
aiolos

keiko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

aiolos

【Nコード】

N9070V

【作者名】

keiko

【あらすじ】

鳥に誘われた世界で何を想う？

離婚した母親と暮らす、ごく普通の少年エンノイアは、ある日、母親の恋人との葛藤から、家を飛び出す。街を走り抜け、川原にたどりついたエンノイアの耳に聞こえてきたのは、「アイオロス」と名乗る、謎の声。謎の声の主は、エンノイアの願いをかなえ、エンノイアの母親を恋人から取り戻してくれるという。そのためには、「アイオリア国」の「プネウマの鏡」を割らなければならない。エンノイアは謎の光に包まれ、ペットの鳥デュークと共に未知の国ア

イオリアへと旅立つ。エンノイアはそこで、さまざまな人たちに出
会い、数奇な運命に巻き込まれていく……。

プロローグ 王

「陛下、いかがなされました」

ゆつたりとしたローブを羽織った青年が、怪訝な顔で訊ねる。

白大理石の柱に囲まれただけの室内。立ち並ぶ柱の隙間という隙間から、春の日差しがほしいままに振舞う。

床に整然と敷き詰められたタイルも、青年の衣服も、全て白一色。紅や碧の宝石の散りばめられた玉座だけが、唯一強烈な色彩を放っていた。

「この国に闇が迫っている」

返ってきたのは、曇りなく、それでいて底の読めない 女の声。

青年の眉が、わずかに歪む。

玉座を見上げたその顔は女性のように繊細で、玉座の上の人物とよく似通っている。腰の位置まで伸ばされ、先端のあたりで緩く束ねられた髪は、空と同じ水色。

「闇、とは？」

謎めいた言葉の真意を求め、彼はさらに問うた。

青年の問いかけに対する答えはない。玉座の主人は掌に水晶球を浮かべ、穿つような眼差しを向けている。薄絹のベールがふわりと揺れ、青年と同じ、空色の豊かな髪が覗き見えた。

その髪よりも深い青を湛えた双眸に、やがて人物の影らしきものが映り込んだ。

「闇を抜えるのは、新たなる王のみ。

アイオロスよ。ここに映し出す者をこの国へ導きなさい。この国の新しき王となるべき人間を！」

第一話 選ばれし少年

> i29716 — 3781 <

不思議な夢を見た。どこかの国の王様が、新しい王を探すのだ。

プジュ……。プジュ……。

うるさいな……。

耳元で目覚まし時計がけたたましく音をたてている。

プジュ……。プジュ……。

わかったよ。起きるよ……。

僕は、しきりに落ちようとしてくる上まぶたと闘いながら、目覚まし時計に手をのばした。

「……？」

下りない。

というか、すでに下りている。

多くの目覚まし時計がそうのように、僕の目覚まし時計はセットするときはレバーを上へ上げ、止めるときは下げる、という仕様になっている。

だが、レバーはすでに下りている。なのに目覚まし時計は鳴り続けている……。

「わぶっ……！」

突然、顔に変なものがあった。モサツとかワサツとかいう感触。黄色い羽根が舞い散る。

羽根……？

「ピュッ！」

ここでようやく目が覚めた。音をたてていたのは目覚まし時計ではなく、一羽の鳥だったのだ。

昨日、目覚まし時計をかけたのを忘れたんだな。

僕の目の前にいたのは、トサカのように羽がピンと立った、黄色い鳥だった。僕の顔に突進してきたソイツは、部屋中を嬉しそうに飛び回っている。

種類は何だろう。インコのようにも見えるが、大きさは僕の顔ほどもある。よく知らないけど、オウムとかの類いかもしれない。だいたいなんで僕の部屋に鳥が……？

「エンノイアー？ 起きてるんだったら下りてきなさい」

「あ、はい！」

ちょっと迷ったが、その鳥を肩にのせると、僕は一階へと下りた。

一階へ下りると、母さんは朝食の支度をしていた。階段を下りてきた僕に気づくと、振り返って言った。

「あら、そのコ、気に入った？」

「えっ！？ 気に入った、ってことはまさか……」

まさか、母さんが僕に？

すると、母さんは満面の笑みで答えた。

「そ。ロバートがあんたにつて。」

……僕は心底がっかりした。
だが、母さんはまだ嬉しそうに続ける。

「優しいよね。今度会ったらお礼言つものよ」

ハア……。

とりあえず、自己紹介をしようと思う。

僕はエンノイア・グノーヴァー。13歳。半年前に私立の中学に入学したばかり。両親は離婚していて、今は母さんと二人暮らし。父親については……あんまり話したくないな。

ロバートっていうのは、母さんの今の彼氏。もう付き合って三年ほどになる。母さんは今の通りロバートに熱をあげているようだけど……。僕はロバートのことがあまり好きじゃない。

「ところでエンノイア」

「うん？」

今日の朝食はパンとコーンフ레이크。バターを塗ったパンにかぶりつきながら、母さんの言葉を待つ。

「今日は早く帰って来てね。大事な話があるから……」
妙に意味深な表情で言う。

「う、うん……」

何だろう？

「へえ、いいなあ！」

「うん。デュークって名前にしたんだ」

ここは中学校の教室。

今話しているのは、ステイブといって、クラスで一番仲のいい友達だ。

そうそう。あの鳥、飼うことにしたんだ。名前はデューク。

「それにしても、ロバートからもらったっていうのが気に入らないよ。あいつ、母さんにいいとこ見せたいだけなんだ」

すると、ステイブが聞いた。

「ロバートのどこがそんなに嫌いなんだ？ 俺、この前、お前んちに行った時会ったけど、いい人そうだったじゃん」

「どっかってわけじゃないけど……」

自分でもよくわからない。ただ、母さんとロバートが楽しそうに話しているのを見ると、なんだかイライラするんだ。

「はーん。ヤキモチだな」

「ヤキモチ？ どういうこと？」

「お前はそのロバート、に母ちゃんを取られるのが怖いんだろ。母ちゃんを一人占めしておきたいんだ」

「ば……！！ 違うよ！！ そんな、子供じゃあるまいし」

「ほら、席に着けー。授業始めるぞ」

カチカチカチカチ……。
時計が9時10分を指している。呆然と時計を眺めながら、考える。

ヤキモチなんかじゃないけどさ……。

なんていうか、ロバートには男らしさがないんだよ。いつもへらへら笑ってるんだ。母さんもあいつのどこがいいんだか……。

「……ノイア」

「？」

誰かに名前を呼ばれたような気がした。

あたりを見回してみただけど、先生は相変わらず教科書を読んでいるし、他の生徒が呼んだ気配もない。気のせいか……。

「……エンノイア」

今度は確かに呼ばれたような気がした。ふと、窓のほうを見ると……。

「デューク!!」

なんと、教卓の横にある窓の外に、デュークがとまっていた。

窓ガラスをくちばしでたたき、侵入を試みている。

なんか、いやな予感……。

パリン!!

デュークはくちばしで窓ガラスを割ると、またまた嬉しそうに、僕のほうに飛んできた。

「デューク! どうしてここに？」

デュークの代わりに、怒りに震えた先生の声が返ってきた。

「エンノイアくん……。それは君のペットかね？」

見上げると……。最悪なことに、デュークは先生の頭の上に大変な落とし物をしていた。

「あーあ！　しばられた、しばられた」

あの後、僕は2時間みっちりお説教を食らった。（僕が連れてきたわけじゃないんだけど）

デュークは何食わぬ顔で飛び回ってるし。

そうだ。今日は早く帰れて言われてたんだっけ。すっかり遅くなっちゃったな。

僕は家の玄関のドアを開けた。すると……。

（ロバート……！？）

居間でロバートと母さんが話している。普段は化粧もしない母さんが、今は髪をたらしして、妙にめかしこんでいる。

「なんだ。ロバートが来てたのか」

何だか無性に腹が立ってきて、僕はそのまま居間を素通りして、二階の自分の部屋に上がろうとした。しかし、

「エンノイア？　帰ってるんだったら、こっちへ来なさい！」
母さんに呼び止められてしまったので、僕は仕方なく居間へ向かうことにした。

「やあ、エンノイアくん、久しぶりだね。おや？ その鳥は。よかった、気に入ってくれたんだね！」

僕は、デュークを肩に乗せたまま居間に来たことを、ひどく後悔した。

「別に。こんなもの、もらったって、迷惑だよ」

「エンノイアー！」

母さんがヒステリックに怒鳴りつける。

「あはは。それもそうだね。悪かったね」

これだ。ロバートのこういうところが腹立つんだ。たまには怒ってみればいいのに。

「ごめんなさい、ロバート。普段はこんな子じゃないんだけど……」

「で？ なんなのさ。大事な話って」

イライラしてきたので、母さんの言葉をさえぎって聞いた。

「あ、それがね。私たち……結婚しようと思うの」

「え……？」

「結婚……って……、どうして……？」

最後の方はほとんど声にならなかった。

「どうしてって。あんただって私たちが付き合ってること知ってるでしょ」

「そういうこと言ってるんじゃないよ！」

ロバートと母さんが、面食らった表情でこっちを見ている。

「どうしてこんなやつと結婚するんだよ！ 母さんはいつもそうだよ！ ちょっと優しくされたらすぐその気になって。こいつだって、結婚したら父さんみたいに豹変するに決まってる。こいつが新しい父親だなんて、僕は認めないからね！」

無我夢中でそう言い終わったとき……。

ピシヤッ。

頬に鈍い痛みが走る。

母さんが僕の頬を叩いたのだ。

「レナ！」

ロバートが慌てて母さんを制止する。

「あんたはどうしてそうわからず屋なの……！ そりゃ、いきなり『この人が新しい父親です』なんて言っても、無理だと思う。けど、あんたは一度でもこの男性のことを理解しようとしたことがあるの！？ ロバートは一生懸命あんたと打ち解けようと頑張ってるのに……」

「よさないか、レナ！」

ロバートが、母さんをなだめながら椅子に座らせる。

「ともかく、座ってゆっくり話そう。ほら、エンノイアくんもこっちにおいで」

「…いだ」

「え？」

「母さんなんて大っつ嫌いだー！ー！！」

バタンツ！

「あ！ エンノイア！！」

僕は、たまらず玄関から飛び出し、街の中を駆け出した。

……どうしてあいつなんだよ。

母さんが仕事で疲れてるときも、父さんが長く家に帰らないときも、支えてきたのは僕なのに。

街の人が驚いて、駆けている僕の方を見る。でも、気にもとめず走り続ける。

やっぱりヤキモチなのかもしれない。でも、怖いんだ。母さんが僕よりロボートの方に行っちゃうのが。

お願いだから、僕を一人にしないでよ。

涙がこぼれてきた。それをごまかすように、僕はひたすら走り続けた。

……十分ほど走っただろうか。ふと気づくと、僕は川原に立っていた。

川原の周りに立った木々の葉が、寒そうに揺れている。まだ、春というには早すぎる3月。川からひんやりとした空気が流れてくる。日が暮れてきて、あたりは肌寒くなってきた。

……コートを着てくれれば良かったな。

少し冷静になって、あらためて考える。

これからどうしよう……。

今すぐ家に帰るわけにはいかないし……。

いや、帰るもんか。ずっとここにいて、心配させてやる。そう思ったとき……。

「……エンノイア」

いつかも聞いた声が、僕の名前を呼んだ。

そつだ、この声、今朝教室で聞いたのと同じだ。

「誰！？ どこから話してるの！？」

僕は宙に向かって聞いた。

あたりには誰もいない。近くの木の枝に、デュークがとまっているだけだ。木々のざわめきが、一層激しくなる。

「我が名はアイオロス。……お前はあの男から母親を取り戻したいのだろう？」

「！」

「取り戻す」という言葉に、僕の心は動揺した。

それに、なぜ声の主はそんなことを知っているんだ？

「と、取り戻したいだなんて……。僕は別に……」

「隠さずともよい。私にはお前のことがわかってるのだ」

僕のことをわかってる？

一体誰だというのだろう。

すると、声の主がとんでもないことを言い出した。

「その願い、かなえてやろう」

「ほんとに！？」

「ただし、条件がある。アイオリア国の、国王が持つ、『プネウマの鏡』を割ってほしい。そうすれば、願いをかなえてやろう」

アイオリア？ まだ世界地図はよく覚えてないけど、そんな国は聞いたことがない。

「アイオリアって……そんな国どこに……」
そう言いかけたとき、目の前が明るく輝いた。あまりの眩しさに、まわりが見えなくなる。木々のざわめきも、川の流れる音も消えていく……。

そのうちに、僕の意識は遠のいていった。

第二話 森の狩人

> i29717 — 3781 <

サワサワサワ……。

心地よい風が吹く。木々の葉がこすれる音がする。

先ほどのように冷たい風ではない。どこか優しく、暖かい風だ。

そつと目を開けてみる。徐々に視界が鮮明になり、そこが森であることが分かった。青々とした緑が日の光を受けて輝いている……。

「森!？」

とつさに飛び起きる。頭や体の上に落ちていた葉っぱが、衝撃で舞い上がった。

「川原にいたのに……どうして森に……?」

僕の町の近くには確かに森があるが、今の季節はこんなに緑豊かではない。それに、どう考えても、自分の足で森まで歩いてきたとは思えない。

ガサツ。

ふいに、背後で物音がした。

「な、何……!?!」

身をこわばらせて、次の反応を待つ。

フー……フー。

何者かの息遣いが聞こえる。おそらく、獣の。

おそろおそろ後ろを振り返る。すると、一匹の獣が僕の目に映った。

角は三本。顔の正面に一本、左右に一本ずつだ。体は獣らしく毛に覆われているが、その毛は淡い黄緑色をしていて、僕が今まで見たどの生き物とも一致しなかった。背丈はかなり大きい。四足歩行の状態で、僕の身長と同じくらいだろうか。

背に、亀のような甲羅を背負っている。甲羅に刻まれた六甲模様
の隙間から、雑草が生えている。その姿が、なんとも滑稽で、愛ら
しいと言えなくもない。

しかし、今の僕に、愛らしいなんて言っている余裕はなかった。
どんな危険な生物か、わからないからな。僕とそいつとの距離は今、
一メートルにも満たない。

とはいえ、見るからに愚鈍そうな獣だ。刺激しないよう、静かに
後ずさる。そうして、そつと立ち上がった時……。
ザッザッ！

僕の動きの何が気に入らなかったのか、そいつは前足で勢いをつ
けると、いきなり僕に向けて突進しだした！

「うわあああああああ！ dfjkslkasadsfd」
もはや気が気じゃない。僕は意味不明な言葉をわめきながら、森
の奥へと走った。だが、獣はしつかり僕の後を追いかけてくる。
突然、何かに蹴つまづいた。あわや転ぶというところで、もう一
方の足でなんとか踏みとどまる。見ると、地面にロープのようなも
のが這わせてあるが……？

すると、今度は頭上から木の杭がふつてきた！ それも何本も何
本も。円を描いて落ちてくるので、僕はその円の中心に避難した。
ふつてきた木の杭は、先がとがっているので、うまい具合に地面に
突き刺さっていく。

ようやく、木の杭の落下がおさまった。幸い、この木の杭におび
えて、獣は追跡をやめたようだ。グルル……と喉を鳴らしながら、
二、三メートル離れた場所から僕の方を見ている。

ハアアアア……。

一息ついて、あたりを見回す。間近の木の枝に、果物の束のよう
なものがぶら下げてある。自然に生えたものではない。果物の束を
網でできた袋に入れて、誰かが木の枝にぶら下げたようだ。

そうか、罨だつたんだな。よく見れば、木の杭のあいだあいだに網がはられている。

あの獣が、ここにある果物を求めて走る。すると、地面に張られたロープに足を引っ掛ける。頭上から、網をはった木の杭がふつてきて、獣を取り囲む。と、まあ、そういうことだろう。それにしても、誰がこんな仕掛けを作ったんだろう。

「伏せろ!!」

ふいに、頭上から声が聞こえてきた。えっ!?! 伏せろって……!?!

「ガアアアア!!」

なんと、遠くにいると思っていたあの獣が、すぐ目の前まで迫っていた。牙の生えた口を大きく開いて、今にも僕に飛びかかろうとしている! いや、僕に飛びかかろうとしているのではなく、後ろの果物を狙っているのか? どちらにしても、危険な状況であることに変わりはない。

「伏せろって言うてるだろ!!」

そ、そうか。伏せるのか……。

僕があわてて頭を下げると、僕の頭のとっぺんの毛をかすめて、何かかものすごい勢いで飛んできた。

それは獣に向けてまっすぐ飛んで行き、獣の額に命中した。矢だ! 誰かが木の上から矢を放ったらしい。

さらに二本の矢が放たれる。一本は獣の首に、一本は脇腹に命中した。

獣は悲鳴を上げながら、しばらく暴れていたが、やがて横に倒れると、動かなくなった。

おそろおそろ木の上を見上げてみると、そこにいたのは、大きな弓をもった……少年だった。太い木の幹に腰かけて、不機嫌そうにこちらを見ている。年は僕よりも少し上のようだ。16~17歳と

いったところだろう。黒いベストの上に、皮の上着を着て、ブーツを履いている。その手に持った弓だけでなく、腰のベルトには短剣ブーツには小ぶりのナイフをさしている。しかし、僕を驚かせたのはその弓の腕前でも、その妙に古風な装備でもなかった。

肩までたらされた髪が、真っ白なのだ。シルバーブロンドとでもいうのだろうか。ほとんど色のないその髪は、あたりの葉の色を反射して、淡く緑色に輝いている。さらに、角度によって銀色、紫色……と微妙に表情を変えている。

僕が少年の方をぼうつと見てみると、彼が口を開いた。

「あーあ、罨を台無しにしゃがって。生け捕りにし損ねたじゃねーか」

その美しい容姿とは裏腹に、ぞんざいな口調。

ともあれ、彼が不機嫌そうにしている理由が分かった。この罨は、彼が仕掛けたものだったのだ。さっきの変な獣を捕まえるために。それが、僕のせいで失敗してしまったのだろう。

だけど、僕だって必死だったんだからな。

「あの……助けてくれてありがとう。それで、ここは一体……」

僕が話し終える前に、少年が木の上から下りてきた。そして、僕の前に歩み寄ると……網ごしに、僕の顔をじいっと見つめ始めた。手をあごに当て、何かを考え込んでいる様子だ。

「な、何ですか？」

「……かわいいな」

僕は、混乱した。

か、かわいいって……。確かに、クラスの女の子に「エンノイアくんって、かわいい〜！」とか、言われたことあるけどさ。そういうことは、男には言われたくないっていうか……。

僕が一人でどぎまぎしているのにはかまわず、彼は続けた。

「羽がきれいだよなー」

ん？ 羽？

僕に羽なんかあったか？

「ひゃっ！」

そのとき、背中に妙な衝撃があった。目の前に黄色い羽根が舞った。

そうだ、黄色い羽根といえば……！

「デューク……！」

なんと、そこにいたのはデュークだった。いつの間にか、近くにいたらしい。

毎度のことながら、神出鬼没だな。こいつ……。

でも、よかった。ここがどこかわからないけど、一人じゃないってだけで、ずいぶんました。

「それで、ここは一体どこなの？」

僕は、目の前の少年に問いかけた。ちなみに、僕はさっき、ハマっていた罾から出してもらっていた。

「何だ、お前よそ者か？　ここはパーンの森。アイオリア島の最南端だ」

「アイオリア！？」

僕は、耳を疑った。

アイオリアって。そう、確か、あの天の声が言っていた言葉。母さんをロバートから取り戻す代わりに、僕に課せられた条件。

「アイオリア国」の「プネウマの鏡」を壊せ、と……。僕はその聞いたことのない国、アイオリアに来てしまったというのか？

僕が一人考えていると、弓の少年は、ブーツにさしていたナイフを取り出し、さっき彼が倒した獣の皮を剥ぎ始めた。

「な、何をしてるの？」

突然の行動にぎょつとした僕は、聞いてみた。

「皮を剥いでるんだよ。皮は都で売れるからな。生け捕りなら、家畜として高く売れるんだが」

「へえ……」

この国の人たちは、こんな動物を家畜にするのか……。

それはともかく、僕は再び考えた。あの、天の声。アイオロスと
か言ってたっけ。あいつが、言っていたことだ。

「アイオリア国の、国王が持つ、『 pneuma の鏡』を割ってほし
い」……。

国王つて都にいるものじゃないのかな。

「よし、決めた！」

なんだ？ という感じで少年が振り返る。

「この人に、都まで連れて行ってもらおう！」

ドテツ。

少年がわざとらしくよろけてみせる。意外にノリのいい人だな。

「なんだそりゃ！ 勝手に決めんな！ だいたいなんで俺がお前を
都に連れてってやらなきゃいけないんだ！」

彼がもつともなことを言った。でも、僕は引き下がらないぞ。

「お願い！！ 僕は、どうしても都に行かなきゃならないんだ。で
も僕は道もわからないし、さっきのやつみたいにな化け物も倒せない
し……」

「だめだな」

少年は、あっさりと否定した。

「都に行くためならなんでもするよ、仕事も手伝うよ！？」

なおも食い下がるが、

「そういう問題じゃねーよ。俺は今すぐ都に行く気はねーし。だい
いち……」

少年が僕の襟首をつかんだ。

「……俺は人間つてのが大嫌いなんだ。とつとと失せる。俺がお前
に優しくしてられるうちにな！」

ドサツ。軽く突き飛ばされた。

「じゃあな。モンスターと魔物に気をつける」

そう言つて、少年は立ち去ってしまった。一人取り残されて、デ

ユークと顔を見合わせる。(こいつ、人間みたいな動きをするんだ) いけそうだったのに。口は悪いけど、なんだかんだでいい人だったし。それに人間が嫌いって……じゃあなんで僕を助けてくれたんだろう？

まあ、考えても仕方ないか……。僕は、とりあえず歩き出すことにした。

ここが、最南端って言うてたな。北に歩けば森の外に出られるだろうか？ 今は夕方みたいだから、太陽が沈みかけている方角が西ということとは、太陽に向かって右向きに進めばいいのか。

僕は、とりあえずそう考えることにして、この見知らぬ大地を歩き始めた。

第三話 暗闇の中で

何時間歩いただろう。すっかり日が暮れて、太陽も見えなくなつた。

しかし、一向に森から出られる気配がない。方向が間違つていたのだろうか。それか、ものすごく広い森で、歩いて出るには何日もかかるのかもしれない。

もう、限界だ。喉はからからだし、お腹も空いた。

とうとう僕は、一本の大きな木の根元に、座り込んでしまった。

「ピピッ」

デュークが、心配そうに僕の顔を覗き込む。

「デューク……。お前、飛べるんだから、どうなってるのか見てきてよ」

通じるわけがないと思いつつ、つぶやいただけだったが、意外にもデュークは「わかった!」と言わんばかりに一声鳴くと、空高く飛んで行った。

しばらくして、デュークが戻ってきた。ひどくあわてている様子だ。

「ピピッ! ピイ! ピピッ!」

「な、何? なんて言ってるの?」

羽をばたつかせて、しきりに何かを訴えているが、僕にはさっぱりわからない。

僕が鳥の言葉でも話せればいいんだけど……。

「あ! デューク!」

しびれをきらしたのか、デュークはどこかへ飛び去ってしまった。

デュークがなかなか戻ってこない。

……もう、僕のことを見捨ててしまったんだろうか。

そりゃ、そうだよな。まだ、飼い始めてから一日しか経ってないんだし。さほど、なついてるってわけでもなかった……かもしれない。

だけど、デュークまでいなくなってしまうと、僕は本当に独りぼっちだ。

真つ暗な森の向こうから、不気味な獣の鳴き声や、うなり声のようなものが聞こえる。

……ふいに、暗闇に恐怖を感じて、身震いした。

あの少年が言ってたっけ。「モンスターと魔物に気をつける」って。

あの三本の角の怪物が「モンスター」なのかな。

じゃあ、「魔物」……って何だろう。

たくさんの恐ろしいイメージが、頭をよぎる。

(そんなもの、いるわけない!!)

僕はあわてて頭からそれらのイメージを振り払うと、暗闇から、明るい月の方へと視線をうつした。

母さん、心配してるかな……。

煌々と輝く月を眺めながら、ふと、母さんのことを考える。

いつもなら今頃、学校であったことを話しながら、母さんの手料理を食べているのに。

……ちゃんと、話し合えばよかった。母さんと、ロバートと。

僕……、何やってるんだろう。

何だか、悲しくなってきた。すごく……みじめな気分だ。

僕が落ち込んでいると、背後から鳥の羽音が聞こえた。

デュークだ！ きっとデュークが戻ってきてくれたんだ！

僕のことを見捨てたわけじゃなかったんだ！

「デューク！」

嬉しくなつて、振り返る。

しかし、僕の目に入ったのは、デュークではなかった。

背後の森に、無数の目、目、目。小さく鋭い二つの光のセットが、森の中の暗闇から、大量にのぞいていたのだ。

羽音がいつそう音量を増して、不吉に響いてくる。

「ひっ……！」

僕は恐ろしくなつて、その場を立ち去ろうと、駆け出した。

と、その時……！

「うわあ！！！」

黒い塊が、僕に向かって大量に飛んできた。羽音の正体は、無数のコウモリだったのだ。

無数のコウモリたちが、僕にまとわりつき、噛みついてくる。

一つ一つの痛みは大したことないが、こつ集団でこられると、たまつたもんじゃない。

耐えきれず、地面に倒れ込む。体を左右に転がし、コウモリをはがそうと頑張るが、コウモリたちは、攻撃を緩めることもなく、まとわりつき続ける。

顔の周りにまでコウモリがはりつき、息ができなくなる。

絶え間ない攻撃と、息苦しさ、意識がもつろつとしてきた……。

僕、死んじゃうのかな。

こんな、わけのわからない場所？ 母さんと仲直りもできない
まま？

そんなの、嫌だッ……!!

必死に叫んだが、声にならなかった。

ヒュッ。

突然、二、三個の石ころが飛んできた。すると、コウモリたちが
一斉に僕から離れていく。

どうやら、飛んできた石を追いかけて行ったようだ。

一体、どうなってるんだ？

不思議に思いながら、傷だらけになってしまった体を起こすと……

「まったく。見てらんないな。プテラスごときに死にそんな顔しや
がって」

そこにいたのは……信じられないことに、最初に会った少年だっ
た。しかもその肩には、デュークがのっけている！

「プテラスは動くものを追う性質があるからな。出会ったら、あんな
まり動かない方がいいぞ」

話の内容から、さっきのコウモリのことを「プテラス」と言っている
のだとわかった。

いや、そんなことはどうでもいい。

「どうして、ここに？ それに、デュークも……」

少年は、こともなげに答える。

「さっき、こいつと会ったんだよ。聞けば、お前が道に迷ってるっ
て言うからさ」

僕は啞然とした。どうして、この少年は、そんなことがわかるの
だろう？

僕には、デュークが何を言っているのか、サッパリだったのに。

少年の肩にとまっていたデュークが、嬉しそうに、僕の肩に飛び移った。心なしか、得意そうな表情をしている。

と、ここで、僕はあることに気がついた。

「じゃあ、僕が道に迷ってるって聞いて、わざわざ助けに来たの？人間嫌いなのに？」

少年の方を見る。

自分でも、その発言と行動の矛盾に、気がつかなかっただらしい。彼の顔がみるみる赤くなってきた。

「べ、別に、助けに来たわけじゃねーよ。俺は、こっちに、用事があつて……」

嘘だな。

顔を真っ赤にしながら、彼は何やら言い訳を続けている。その様子が無性におかしくて、僕は吹き出してしまった。

「な、なんだよ！ 何がおかしいんだよ！」

彼が怒りだしたのがまたおかしくて、一層激しく笑い続ける。ヒィー、涙を流しながら、笑い転げる。

緊張の糸が解けて、僕は笑いが止まらなかった。

夜の暗闇の中に僕の笑い声が、ひときわ大きく響いた。

第四話 闇からの襲来 part 1

目の前に、スープと一切れのパンが置かれている。そのスープの皿を両手で持つと、じんわりと温かさが伝わってきた。

小さく刻まれたキノコが浮いただけの、実に質素なものだが、それでも今の僕にはご馳走に違いなかった。

目の前には焚き火が燃えていて、火の爆ぜる音がなんとも心地いい。

僕は、夏休みのキャンプで焚いた、キャンプファイアーのことを思い出していた。

もつとも、あの時のキャンプファイアーはもつとずつとにぎやかだったけれど。

今は、肩の上でうつらうつらしているデュークを除けば、隣に少年がひとり座っているだけだ。

まだ幼さの残るその横顔は、彫刻のように美しく、軽やかで、非現実的にさえ感じられた。

少年の長いまつ毛が頬に深い影を落とし、両肩に落ちたシルバーブロンドの髪は、焚き火のゆらめきを映し出していた。

彼の名はシーア・ユークリッド。職業は、ハンターといったところかな。

各地の森を転々としては動物を狩り、その動物から得た骨や皮を街で売りながら暮らしているらしい。

まだ高校生くらいの年齢だというのに、なぜそんな暮らしをしているのか。気になったが、そこまでは聞くことができなかった。

(もしかしたらこの国では普通のことなのかもしれないけど……)

え？ なぜ僕が彼と一緒にいて、しかもご飯を食べているかって？

話は、僕がコウモリに襲われているのを、シーアに助けてもらったところまでさかのぼるんだけど。

助けてもらった後、シーアが、照れ隠しに言い訳していたのがおかしかったのと、緊張が一気にゆるんだのもあって、僕は笑いが止まらなかった。

『何がおかしいんだよ!』とか、『笑うのをやめないと怒るぞ!』とか、何やらわめいていたシーアだったが、突然、笑っている僕に、網でできたカゴをかぶせてきた。

「わっ! いきなり何するんだよ!」

「薪集めてこい!」

「はあ? 薪?」

全くわけがわからない。すると、シーアが言った。

「仕事、手伝うって言ったろ?」

確かに言ったけど……。それは、都に連れていってもらった交換条件として言ったんだ。

あ、あれ? てことは……。

見れば、シーアはなんとも照れ臭そうにしている。

「一緒に行つていいの!?!」

「まあ、この際しょうがないだろ」

何がしょうがないのかよくわからないが、とにかく連れていってもらえることになったようだ!

「さっさと薪集めてこいよ!」

そんなわけで、僕は彼と都に行くことになったのだった。

そうそう、なんとこのスープ、彼が作ってくれたのだ。

シーアは荷物の袋からいそいそと鍋を取り出すと、僕が集めてきた薪を使って、焚き火を起こし、あつという間にスープを作ってしまった。

これが、すごくおいしいんだ。きつと、いつも森で生活してるか

ら、こつこついうことに慣れてるんだろつな。

彼はさつきから、こつちの方を見向きもせずスープを飲んでいくけど。

「ピピッ」

僕の肩の上で眠りかけていたデュークが目を覚まし、シーアの方へ飛んで行った。

「お、お前も食うか？」

シーアは、デュークに気づくと、手元のパンを細かくちぎり、デュークに食べさせ始めた。

満面の笑みを浮かべて、すごく楽しそうな様子だ。

彼が笑うのを、僕は初めて見た気がする。

そういえば、デュークのことを「かわいい」って言ってたな。

「動物が好きなんだね！」

僕が言うと、シーアは僕がその場にいることを忘れていたかのようには驚いた。

「ま、まあな」

ちよつと気まずそうにした後、

「動物は裏切らないから……」

聞こえるか、聞こえないくらいの声で、つぶやいた。

動物は裏切らない？

なんかよくわからないけど、意味深な言葉だな……。

「さて、明日も歩くし、そろそろ寝るか」

シーアは、先ほどの荷物から、薄い布を二枚取り出すと、それを地べたに布団のように敷いた。促されるまま、その中に潜り込む。

「あれ、シーアは寝ないの？」

てつきり、もう一組布を出すのかと思ったら、シーアは木にもたれて座ったままだ。

「ん？ ああ。俺は火の見張りだから」

そうか。ここにはあの変な怪物とかがいるもんな。火を絶やしちやいけないんだ。

っていうか、それをシーア一人に任せていいんだろうか!? 僕も交代で見張った方がいいんじゃないか?

「当ったり前だ。二時間したら起こすからな。さっさと寝ろ」
なんだ、シーアは初めからそのつもりらしい。

しかし、僕はなかなか眠ることができなかつた。寝ている地面が固すぎるせいもあるが、いろんな考えが絶え間なく頭をよぎって、落ち着かなかつたからだ。

母さんは、どうしているだろう。結局、夜も帰らなかつたことになる。きつと、心配しているだろうな……。

そうだ、今日は見たい番組があつたんだっけ。母さん録画してくれているかな。

明日の学校はどうなるんだろう。無断で休んだら怒られないかな?

眠れないな……。

ふとシーアの方を見ると、彼は木にもたれかかつたまま、顔を伏せていた。

僕が声をかけると、すぐに伏せていた顔を起こす。眠っていたわけではないらしい。

どうにも考えがまとまらないので、彼に話しかけてみることにした。

「シーア、プネウマの鏡……って知ってる?」

意外にも、すぐに返答がきた。

「ああ、聞いたことあるな。確か魔界と通じてるっていう……」

「ま、魔界!? 魔界なんてものが本当にあるの!?!」

僕は、驚いた。思わず布団からはね起きる。

モンスターに、魔物に、魔界だつて？ 非現実的にもほどがある。
「さあな。でも、魔物は魔界から来るらしいぜ」
「その、モンスターとか、魔物とかつて何なの？」
「さつきから気になっていたことを聞いてみた。」
「そんなことも知らねーのか？」
「だつてしょうがないじゃん。僕の国にはそんなものないんだから。」

シーアは、ため息混じりに、説明を始めた。

「いいか。モンスターっていうのは、長い間、月の光を浴び続けた動植物が変化したものだ。俺がさつき捕まえようとしていた、三本角のアイツなんかがそうだ。多少凶暴だが、奴らのテリトリーを侵さない限り、普通襲われることはない」

へえ……。でもアイツ、元は何の動物だったんだ？ あんな動物見たことないぞ。

「アイツは、雑草か何かだろ。最もありふれたモンスターだとも言えるな。トリプスって呼ばれてる」

「そういえば、甲羅のような背中に雑草が生えてたっけ。しかし、随分とアクティブな雑草だ。」

「対して、魔物ってえのは、魔界から来る、と言われてる生き物で、知能が高く、町や村を襲うこともある。大抵は夜にしか出ないな」

「なんだか、ものすごい話になってきたな……」。

森の中を闊歩するモンスター。魔界と呼ばれる場所から来るといふ魔物たち。そして、その魔界と繋がっているという、プネウマの鏡……。この国は、僕の住んでいる世界とは随分と異なるようだ。眠れるわけがないと思っていたが、さすがに精神的な疲れもあつてか、シーアが話を終える頃には眠りに落ちていた。

もつとも、二時間後にはきつちり叩き起こされたけど。

見張りを交代し、二時間後ほど経ったところで、再びシーアを起

こし、眠りについた。

「私たち二人きりで暮らすことにしたの。エンノイア、あんたが邪魔なのよ」

母さんが、ロバートとどこかへ行ってしまおう。

嫌だ！ 僕を置いていかないで！

「母さん！」

叫びながら、母さんの背中を必死でつかむ。

「母さん！ 行かないで！」

やった！ つかまえた……！！

「誰が母さんだ」

つかまえたのは、母さんではなかった。

寝ぼけ眼をこすりながら、よく見ると、それはあきれ顔をしたシーアだった。僕は間違っつて、シーアの上着をつかんでいたらしい。

なーんだ。夢か。てっきり母さんが、僕をおいてロバートとどこかへ行っちゃうのかと思った。

「それで、あとどのくらいかかりそうなの？」

昨日の残りのスープを食べた後、僕たちは早々に出発した。

「そうだな。あと三日ってとこかな……」

「三日あ！？ もうちよつと早く行けないの？」

三日も留守にするなんて。喧嘩して飛び出してきたとはいえ、いくらなんでも母さんが心配するよ。下手すると搜索願いなんか出されちゃうかもしれない！

「無茶いうなよ。馬でも一日かかる距離なんだから」

馬を基準に言われてもよくわからないけど……。

ガサツ。

だしぬけに、森の中から物音がした。僕とシリアに、明らかな緊張が走る。

ガサツガサツガサツガサツ。

ついてきてるな……。姿は見えないが、木から木へ、飛び移っている気配がする。

トリプスではなさそうだ。もっと身軽なやつだ。

一瞬昨晚のコウモリたちが頭に浮かぶが、少なくともあのような大群ではないだろう。

「シリア……」

「しっ。黙ってる」

見れば、シリアはとつくに弓を構えている。

ガサツ！

ソイツが僕らの横を通りすぎた時、シリアが矢を放った。放たれた矢はまっすぐ飛んでいき、木々の中に吸い込まれていったかと思うと、何か黒い物体を伴って落ちてきた。

シリアと共に、その物体に駆け寄る。

よく見ると、それは小さなドラゴンだった。

いや、実際のところ、ドラゴンなんて見たことがないけど。それは、物語なんかでよく見るドラゴンにそっくりだった。

ただし、すごく小さい。それから、足と翼は持っているが、手はないようだった。

「コイツは魔物だな……」

そのドラゴン？ を見て、シリアが呟く。

そうか、魔物……。

魔物とは、魔界から来る、と言われている生き物で、知能が高く、町や村を襲うこともあるという。

それにしてもおかしい。確かシリアは魔物は夜にしか出ないと言

つていたはずだけど……。

「そうなんだ。近頃明るいうちから魔物が出ることもある。これは何か、この国でおかしいことが起こっているのかもしれない……」

僕らはそれから、日が暮れるまで歩き続けた。

辺りが夕闇に包まれた頃、僕らの目の前に一つの村が現れた。

「村だ！」

僕は歓喜した。疲れ果てて、もう一步も動けそうになかったからだ。

今日は晴れていたというのに、僕もシアーも雨に降られたように汗でびっしょりだ。

相変わらず元気なのは、鳥のデュークくらい。ちえ、飛べるやつはいいよな。

ともかくこれでゆっくり休める……。

「さて、ここら辺でひと休みするか！」

そう言いながらシアーが荷物を置いた。「ここら辺」とは、まだ村に入りきれない森の地面の上だった。

そして、昨日と同じように、焚き火を組み立て始めてしまった。

「む、村に入らないの!？」

僕が慌てて聞くと、シアーはさも当たり前のように答えた。

「言つたる。俺は人間が嫌いだって」

「で、でも……!」

足が棒になつたように疲れていても、滝のように汗をかいていても、村の宿で休むことを拒否するほど人間嫌いだななんて。

「それに、宿に泊まる金なんかねーし」

た、確かに……。

僕は家に財布を置いたままだし、向こうのお金がこの国で通用するとも思えない。民家に泊めてもらえるよう交渉することもできたかもしれないが、もう僕にそんなことをする体力は残っていなかった。

た。

「じゃあ、僕も野宿する……」

僕は、心底がっかりしながら、了解した。

シーアはそんな僕の様子なんか気にも留めず、早速晩御飯の支度をしていた。

第五話 闇からの襲来 part 2

「……イア」

誰かが遠くで呼んでいる気がする。

「……ノイア」

まただ。

うつすら目を開ける。まだ夜中のようだ。

眠いんだよ。邪魔しないでよ。

ほんの少し身動きして、再び深い眠りに落ちようとしたとき……。

「エンノイア！」

僕は飛び起きた。

瞬時にあたりを見回して、自分の置かれた状況を理解する。

そうだ！ 今は僕が火の見張りをしていたんだっ！ 寝ている場合じゃない！

よかった……。火は消えてない。

煌々と灯った焚き火の炎を見ながら、ほっと肩をなでおろす。

やれやれ、今日は一日中歩いたからな。

昨日はシーアが先に見張りをしたので、今日は僕が先に見張りをすることになったのだが、なにしろ疲れた。

数分と経たないうちに僕は眠りこけてしまっていたのだ。

この国には、『モンスター』と呼ばれる、動植物が変化し、凶暴化した生き物たちと、『魔物』と呼ばれる、魔界から来る生き物たちがいる。

森の中だから、普通の野生の動物なんかもいるだろう。

そういった者たちに襲われないようにするため、火を焚き、夜通し見張りをしなければならないのだ。

僕は、昨日襲われた、コウモリのような姿をしたモンスター

『プテラス』というらしい のことを思い出して、身震いした。

もう二度とあんなのには関わりたくない。しっかり見張らなきゃな。

両頬を軽くたたいて、自分自身を戒めた後、ふと、焚き火の反対側で眠るシーアを見た。

焚き火に照らされる、シルバーブロンドの髪。肩まで届く長い髪を、束ねることもなく、無造作に投げ出している。

こちらからは顔は見えないが、スースーと寝息が聞こえる。

……彼について、気付いたことがある。

昨日の夜も同じように火の見張りをした。

二時間ずつ交代で、片方は見張りをし、その間片方は眠る。

……しかし彼は、僕と見張りを交代した後も、ときどき起きては僕の様子をうかがっていたのだ。

最初は、眠れないのかな、とか、僕が居眠りをしないか心配なのかな、とか、思った。

でも、次第に、僕を警戒してるっていうのかな……、僕があやしい動きをしないか、目を光らせていることがわかった。まるで、人間におびえる獣のように。

寝る時も決して短剣を手放さない。

普段は、ちよっぴり素直じゃないけど、優しくて、意外とノリが良くて、普通の少年に見える。

けれど、森の中に隠れ住み、他人の前で眠ることを警戒し、村に入ることを拒む。

そういったことが、シリアがこれまでたどってきた人生を物語っているような気がした。

しかし、さすがに疲れたんだろう。今日はぐっすり眠っているように見える。

起きていた気配も、起きだす気配もなさそうだった。

ん？ ちょっと待て。

じゃあ誰が僕の名前を呼んで、僕を起こしたんだ？

「ピピッ！」

僕が考えていると、どこにいたのか、デュークがひどくあわてた様子で飛んできた。

デュークがあわてているのを見るのは、これで二度目だ。

一度目は、僕が森で道に迷っていた時。

なんとデュークは、一度は離れたシリアを、呼びに行ってくれたのだ。

どういうわけか、シリアにはデュークの言いたいことがわかるように、僕が道に迷ったことを悟り、助けに来てくれた。

僕には、デュークの言っていることはわからない。

でも、今回はそんな心配をする必要はなかった。

なぜなら、すぐにデュークがあわてている理由がわかったからだ。

「げえッ!？」

ものすごい突風が顔に吹きつける。

とても目を開けていられない。

あんなに頑張っただけに見張っていた火も、あえなく消えてしまった。

間もなく、突風を起こした原因のものが現れた。

ドラゴンだ！ とてつもなく大きなドラゴンだ！

緑色の大きな翼で、森の上空を優雅に飛んでいく。

足に、鋭い爪があるのがわかる。

よく見れば、そのドラゴンには手がなく、朝に見た小さなドラゴンに似ていた。

もちろん、大きさは全然違う。

片方の翼だけでも、僕の身長くらいはありそうだ。

「シーア！ 起きて！」

あわててシーアをたたき起こす。

しかし起こすまでもなくシーアはとつくに起きていた。

あまりの風に立ち上がれないでいるようだ。

「魔物だ！ ワイバーンだ！」

シーアが叫ぶ。

そのワイバーンと呼ばれたドラゴンは巨大な翼をはためかせながら、僕たちの頭上を飛び去って行った。

飛び去った後もしばらく風は収まらず、あたりの木々の葉を巻きあげていった。

「逃げるぞ！」

呆然と突っ立っていた僕の腕をつかみ、シーアが急かす。

僕たちは取るもの取りあえず、息も絶え絶えに、森の中を走った。

村から百メートルほど離れたところで、振り返り、様子を見ることにした。

そう、ドラゴンが飛び去ったのは、村の方向なのだ！

そして、僕は信じられない光景を目の当たりにした。

村の上空を飛んでいたドラゴンが、大きく息を吸うと、口から巨大な炎を吐いたのだ。

先ほどまで暗闇だった森の中は、明るく照らしだされ、ここまで熱気が伝わってきた。

熱気にあおられて、森のざわめきが激しくなる。

一瞬にして、村は炎に包まれた。

人の気配すらほとんどしなかつた静かな村が、一転して悲鳴と轟音に包まれた。

燃え上がる家々から、次々と村人たちが飛び出してくる。

赤ん坊を抱えた女、親とはぐれたのである子供たち、炎に囲まれて行き場のなくなった老人……。

懸命に家を消火しようとする者もいたが、とても意味のあることとは思えなかつた。

村が、文字通り地獄のように変わってしまったのだ。

すると突然、村の上空を飛んでいたドラゴンが下降し始めた。

「あ！ シーア！ 女の子が！」

村の中央広場に降り立ったドラゴンは、炎から逃れようと広場を逃げ回っていた少女の肩をその鋭い爪でつかむと、少女をつかんだまま再び上昇し始めてしまった！

「さらうつもりなんだ。大変！ 助けなきゃ！」

僕はシーアの方を振り返り、そう言ったが、

「いや……助けても無駄だ、行こう」

なんとシーアはそう言うと、村とは反対方向に歩き出そうとしていた。

「無駄……だつて？」

僕は耳を疑った。

見捨てろつていうのか！？

目の前で村が襲われているのに！？ 女の子がさらわれようとしているのに！？

……シーアはいいやつだと思つてた。

素直じゃなくても。人間嫌いでも。

なんだかんだで僕を助けてくれた。
それなのに……。

「そんなの納得できない!!」

僕は思わず叫んでいた。

シーアが驚いて僕の方を見る。

「弓を貸して！ 僕が助ける！」

僕はシーアが背負っている大きな弓を、すかさず奪い取ると、ドラゴンに向かって構えた。

弓の弦じゆんが思った以上にかたい。歯を食いしばりながら引くのがやっつた。

「お、お前、弓が使えるのか!？」

シーアが背後で叫ぶ。

「やったことないけど……」

弓を一層強く引く。弦じゆんが指に食い込んで痛い。

「やるしか……ないだろ……!!!!」

叫ぶと同時に、僕は矢を放った。

第六話 闇からの襲来 part 3

ヒュンッ!!

矢は、放物線を描きながら、勢いよく飛んで行った……………

……………ドラゴンとは全然違う方向に。

当然ながら、ドラゴンは全くひるむことなく、少女をつかんだまままだ。

「あれ？」

「お前……………下手だな」

シリアがあきれた声で言った。

「貸せ。弓っていうのはこうやって射るんだ」

シリアは、僕から弓をむしり取ると、その繊細な外見からは想像できないほど、軽々と弓を引いた。

そして、矢は正確にドラゴンの足を貫いた。

ギャオオオウ!!

ドラゴンは悲鳴を上げ、しばらく暴れていたが、やがて少女を解放した。

「あ！ 落ちるよ！」

少し高いところまで浮上していたので、放された少女は森の中に落下してしまったのだ。

「下は森だから大丈夫だろ。それより……………来るぞ！」

シリアが言うよりも早く、怒りに狂ったドラゴンが、こちらに向かって突進してきた！

ものすごい風圧で、何が何だか分からなくなる。

ドラゴンの鋭い爪が、目の前に迫ってきた。

身がすくんで、動くことができない。目を固く閉じ、身をかがめ、ドラゴンが過ぎ去るのを待つ。

一瞬、何かが覆いかぶさってくるような感触がした。

ビュウウウウウウ。

ようやく、風がおさまり、おそろおそろ目を開ける。

……………？

特に、何事もなかったようだ。ドラゴンにさらわれたわけでも、怪我をしたわけでもない。

だが、シーアはそうではなかった。

苦しそくに息をつきながら、しゃがんでいる。

「くっ……………」

「シーア！」

なんと、シーアはあのドラゴンの鋭い爪で、肩を引っ搔かれていたのだ！

大怪我というほどではないが、服が裂け、血が出ている。

破れた服の隙間から、肌に痛々しい数本の筋が見える。

肩に触れようとすると、うるさそうに払いのけられた。

「いいからお前はあの女を助けに行け！」

「シーアはどうするの！？」

まさか、こんなところに置いては行けない。

「俺は、あいつを倒す……………！！！」

ハア、ハア、ハア。

草木をかきわけながら、必死で少女を探す。

村からは少し離れたところに落ちたようだ。

ドラゴンは、再び村の広場のあたりを旋回していた。

下の方から、数本の矢が飛んでくる。

その何本かはドラゴンに刺さり、何本かはうまくかわされた。

(シーアが戦ってるんだな)

村の様子を確認してから、再び少女を探し始めた。

と、その時、草と草との間に、赤いスカートとそこから出た茶色のブーツの足が見えた。

あの女の子が履いていたものだ！

急いで草をかき分ける。

すると、落ち葉にまぎれて、一人の少女が倒れていた。

思った通り、さつきドラゴンにつかまっていた少女だ。

歳は、僕と同じくらいだろうか？ 金色の長い髪に、カチューシヤをしている。

気を失ってはいるが、幸い、目立った怪我はないようだ。

どうやって運ぼうか考えあぐねていたら、彼女が目を覚ました。

「あ……あなたが助けてくださったんですか？」

ありやりや。まいったな。

そうとも言えるし、そうでないとも……。

とりあえず、僕はちゃっかり手柄を自分のものにしておいた。

彼女に肩を貸し、歩きながら、僕はあることについて考えていた。

さつき、ドラゴンに襲われた時。

一瞬何かが覆いかぶさってきたような気がした。

あれは、シーアが僕をかばってくれたのだ……。

だから、僕は怪我をせずにすみ、彼は肩を引っ掻かれてしまった。人間嫌いと言いながら、僕をかばってくれる。少女を見捨てる

言いながら、今こうして村のために戦っている。

僕にはシーアがよくわからないよ……。

木の下に身を隠しながら、少女と共に村の入口まで行くと、シー

アは相変わらずドラゴンに矢を放っていた。

しかし、残念なことに、ドラゴンの巨大な胴体には、シーアのちっぽけな矢などかすり傷でしかないようだ。

何本矢が刺さるうが、全く動じていない。

ドラゴンが再び大きく息を吸い始めた。
炎を吐く気だ！

「あーんママー！」
間の悪いことに、親とはぐれてしまった小さな子供が、広場に出てきてしまった。

ドラゴンがそちらを振り向く。

「危ね……!!」

シーアがとっさに子供をかばった。

ちょうどその時、ドラゴンが炎を吐いた！

「うわああああ!!」

「シーア!!」

背中に炎をくらってしまった。

がっくりとうなだれるシーア。

「村に他に戦える人はいないの!？」

さつき助けた少女に尋ねる。

「若い男は皆出稼ぎに行っているんです……村に残っているのは女
子供と老人ばかりで」

本当に申し訳なさそうに、少女が答えた。

「そんな……。じゃあどうしたら……。」

突然、僕の脇からデュークが飛び出した。

そのまま真っ直ぐドラゴンへと向かって行く。

そして、ドラゴンの顔を嘴でつつき始めた。

「デューク! 何をする気だ!」

案の定デュークはあっさりとドラゴンの翼に払いのけられてしま
った。

しかし、それでもめげずにまわりつき続ける。

とうとうしびれを切らしたドラゴンが、デュークに向かって軽く
火を吐いた。

軽くといつても、デュークにとっては全身が包まれるほどの炎だ。真つ黒になったデュークが、広場に墜落してきた。僕はあわててデュークを助けに行った。

見るも無残な黒い塊が、煙を出しながら、広場に落ちている。嫌だ嫌だ！ デュークが死んじやうなんて！

泣きそうになるのをこらえながら、そつとデュークを拾いあげると、少々羽が焦げてはいるが、デュークはピンピンしていた。

僕の顔を見るなり嬉しそうに羽ばたいた。それを見て、なおさら涙が出そうになる。

「デューク！ どうしてあんな危ないことをしたんだよ！」
デュークを叱ろうとして、僕はドキリとした。

デュークの目は、真つ直ぐ僕を見ていた。

まるで、何かを訴えかけるように。
まるで、僕を試すように。

僕には、デュークの言葉はわからないけど。
その目線の意味は、わかる気がした。

「デューク、お前……、まさか僕に戦えって……？」
返事をするように、デュークは一際大きな声で鳴いた。

そつだ、戦わなくちゃ！ 助けなきや！

村の人たちを。そして、シアアを。

だけど、どうしたらいい？

僕には、力も、武器もない。
何か良い方法はないだろうか？

あたりを見回すと、家屋から焼け落ちた丸太が一本、落ちていた。そうか、これなら……。

アイツは意外にも、炎を吐く時、特定の場所を狙って吐いている。魔物は知能が高いのだと、シアアは言っていた。

僕は閃いた。

本当に、一か八かの方法だけだ。

或いは、うまくいくかもしれない。

シリアは、新たな矢を取ろうとして、もう矢が残っていないことに気がついた。

ドラゴンが、勝ち誇ったように、シリアに向けて炎を吐く準備をしている。

不意のことに、シリアは避けることができず、立ち尽くしていた。

僕は大きくシリアを突飛ばし、かばった。

ゴオオオオ。

もろにくらうことは避けられたが、熱気が背中に当たる。

背中が焼けそうなほど熱くなった。

「エ、エンノイア!？」

シリアが目を見開いて驚いている。

僕は、シリアをかばうようにして立つと、ドラゴンに向かって声高に叫んだ。

「やいワイバーン! 村を焼くなんてずるいぞ! 僕と正々堂々勝負しろ! 負けたら大人しく帰るんだぞ!」

シリア含めて、周りの人たちは皆「何を言ってるんだコイツは…」と言わんばかりにぼかんとまってしまった。

ドラゴンにこんなこと言ってもしょうがないと思う。

でもセリフはどうでもいいんだ。

ヤツの気が引ければ。

僕は方向転換して、ドラゴンを挑発するように走った。

狙い通り、ヤツは僕の後をついてくる。

身を低くし、炎を吐く準備をしている。

徐々に高度を下げ、手の届くほどの高さになった。

そしてついに、大きく息を吸い込んだ……。
今だ！

僕は、さつき見つけた丸太を拾い上げると、それを勢いよくドラゴンの口にねじ込んだ。

やった！

突然のことにドラゴンは目を白黒させながら動揺している。

必死に足をバタつかせるが、丸太はドラゴンの口にピッタリとはまっているので、なかなか取れない。

さあ、これでとどめをさせば……！

ここで、僕は、自分の作戦の致命的なミスに気づいた。

僕にはドラゴンにとどめをさす手段がないのだ。

その時、ふいに肩を叩かれ、声が聞こえた。

「よし！ 後は任せる！」

シニアだ！

シニアは腰のベルトから短剣を取り出すと、未だ暴れているドラゴンの腹に突き立てた。

ギヤオオオオオオオオ！！

耳をつんざくような悲鳴が、村中に響き渡る。

シニアが勢いよく剣を引き抜くと、ドラゴンの腹からどす黒い血があふれ出てきた。

さらにもう一撃加えようと、剣を構える。

と、その時。ふいにドラゴンが翼をはためかせた。

「うわ！」

翼に弾き飛ばされるシニア。

ドラゴンはそのまま浮上すると、一気に飛び去ってしまった。
しばらく警戒して注意深く見つめていたが、どうやら村に戻ってくる様子はなさそうだ。

「ちっ、長い剣ならとどめがさせたのに……」

シーアがひとりごちた。

「シーア！」

僕はシーアに駆け寄った。さっきの肩の怪我と、服の背中が少し焼けていること以外は、特に大きな怪我はないようだ。

「この、ばか！」

ポカッ。

あれれ、てつきり褒められると思っていたのに。いきなりこづかれてしまった！

「なんて無茶なことをするんだ！ 失敗したらどうするつもりだったんだ！？」

再び手を振り上げた。またたかれると思い、とっさに目をつぶると……。

「……だけど。お前見かけによらず勇氣あるんだな。感心したぜ」

シーアはそう言っつて、僕の頭にふわりと手を置いた。

そつと目を開けると、シーアは笑っていた。

その様子を見て、胸に何か、熱いものが込み上げてきた。

この国に来てよかった。シーアに会えてよかった……。

大げさだけど、僕は、そんな気持ちになっていた。

僕は笑って、シーアとハイタッチした。

森の方から、何人かの人の声が聞こえてきた。

避難していた村人たちのようだ。

あの少女が言っていた通り、村人のなかには、老人と女子供しか見当たらなかった。

その中の、リーダー格と思しき老人が前に進み出た。

実のところを言うと、僕はちょっと不謹慎な期待を抱いていた。

はつきり言っつて、僕たちはヒーローだ。この村を救ったんだから。

だからきつと、この後、村長に感謝の言葉なんかを言われて、村中の女の子にちやほやされて、村に伝わる宝なんかを貰ったりしてそんな勝手な想像をしていた。

しかし、男の口から告げられたのは予想外の言葉だった。

「お前たちは余計なことをしてくれたな」

「え……？」

「見る。村はすっかり焼かれてしまった。これで明日からどうやって暮らせというんだ」

そ、それはそうだけど……。

村が焼かれたのは僕たちの責任じゃない。

すると、その男は僕の隣にいたさっきの少女を見た。

「その娘を差し出せば魔物も大人しく帰ってくれたかもしれんのに

……」

「そんなぁ……！」

助けを請うように、シリアの方を見る。

しかし、シリアは、皮肉っぽい笑いを浮かべ、

「だから言っただろ？ 助けても無駄だって」

そう言って、村の外へと歩き出してしまった。

僕も、村人たちに追われるように、村を出た。

あの少女が、物言いたげに、村を去る僕たちを見つめていた……。

第七話 草原の都

村人たちに追われるように村を出た僕たちは、再び都に向けて歩き出した。

「そりゃ、感謝されたくて助けたわけじゃないけどさ。なににもあんな言い方しなくても……」

僕は、黙々と前を歩くシエアに、愚痴をこぼし続けていた。

「それに、納得いかないよ！ 村のために、あのコを犠牲にしようだなんて！」

すると、ずっと押し黙ったまま歩いていたシエアが、初めて口を開いた。

「人間なんてそんなもんさ。自分の利益のためなら、平気で他人を踏みにじるんだ……」

この言葉には、胸を締め付けられる思いがした。

それはおそらく、彼の経験から出た言葉なのだろう。

少女を助けることを、無駄だと言ったシエア。きっと、今までにも、幾度となく人に傷つけられ、失望させられてきたのだろう。

それこそが、彼の、人間嫌いの所以ゆえんなのかもしれない。

「あの……！」

ふいに、後ろから呼び止められた。

振り返ると、先ほどドラゴンにさらわれそうになった、あの少女が立っていた。

二人で僕らを追ってきたのだろう、隣には母親と思しき女性も立っている。

少女は、かすり傷をおった右腕に包帯を巻いていた。

「やあ君はさっきの。もう怪我はいいの？」

「は、はい。お陰様で。あの、それより……」
少女はなんと辛そうな表情で話を続けた。

「さっきの村長の言ったこと……。どうかお気になさらないで下さい。近頃は魔物の襲撃が多く、村の者も気が立っているんです」
僕は驚いた。

この少女は、僕たちを励ますためにわざわざ追いかけてきてくれたのか？

「それに私は助けにただいてすごく感謝しています！ だからどうか……気を落とさないで下さい……」

最後の方は、まるで懇願するようだった。

どうして、この少女を犠牲にすることなどできるだろう。

こんなに優しい女の子なのに……。

さっきの男（おそらく村長と思われる）の言葉が、胸に突き刺さる。

僕は、精一杯の笑顔で答えた。

「大丈夫。全然気にしてないよ！ 君にそう言ってもらえてよかった」

全然気にしてないっていうのは……嘘になるかもしれない。

しかし、少女は僕の言葉を聞いて、とても喜んでくれたようだ。

「そうだ！ あなた達は旅の方ですよね？」

旅なんて大げさなものじゃないが、曖昧にうなずいておく。

「うちのトラちゃんを使って下さい！」

「トラちゃん？」

「うちで飼ってるんです。元々はこの森にいるモンスターなんですけど。人に慣れてるから大丈夫ですよ！ 今連れてきます！」

そう言つと、少女はまた村の方へと駆けていった。

なんか嫌な予感……。

「これが、うちのトラちゃんです！」

そう言って少女が連れてきたのは、はじめこの国に来た時に襲われた、あの雑草モンスター
トリプスだった。

僕とトリプスはどうも相性が合わないらしい。

その『トラちゃん』は、僕を見るなりうなり声を上げ始めた。

そして、案の定、僕を追いかけ始めたのだった。

「あつ！　こら！　やめなさい！」

「うわああああああー！」

ここは、アイオリアの都、アエロポリス。

賑やかながらも、気品ある城下町では、今日も新鮮な食材を売る市場の音が響いていた。

家々の白い壁が、春の日差しを受けて輝いている。

街の最深部には、円柱状の柱で支えられた、王宮が見える。

柱には植物の蔓が巻きついていて、どこか有機的で優美な雰囲気
を醸し出している。

王宮の広間では、見るからに善良そうな顔をした老若男女が、目
を輝かせながら、王の登場を今か今かと待っていた。

その人々をかき分けながら、後ろに数人の兵士を従えて、一人の
男が歩いてくる。

王宮の奥へと続く扉に近づくと、見張りの兵士が、男に軽く会釈
した。

兵士は、モヒカン頭のような飾りのついた兜をかぶり、サンダル
を履いている。

「これはこれは、隊長どの」

「王はどこにおられる？」

少しいらだつた調子で、男が尋ねる。

「中庭に行かれましたよ」

「中庭!? お一人でか?」

「はあ。何でも大事なお客様がいらつしやるそうで……」

客が来るなど聞いていない。男はあからさまに怪訝な顔になった。

「客?」

「ねえシリア。これって端から見たら結構恥ずかしいよね」

「言つなよ。これだって歩くよりや速いんだぜ」

森を抜け、村を出て、小高い丘に辿り着いた僕たちは、トリプスの背に揺られながら、一路、都を目指していた。

「ほら、見えてきたぜ。王都アエロポリスだ」

丘から見下ろしたところは、一面の草原になっている。

シリアが指差した先を見て、僕は息を呑んだ。

丘の下は、その街を除けば、ただただ草原が広がるばかり。

大海原に浮かぶ一艘の舟のように、都は草原の中に忽然と姿を現した。

真っ白な建物と青々とした草原との、コントラストが美しい。

街は円形の城壁に囲まれているのだが、城壁の外まで建物がはみ出していて、大きな街であることがわかる。

街の奥の方には王宮らしき巨大な建物と、神殿のようなものが見えた。

どちらも白大理石でつくられたエンタシスの柱。

僕は、古代ギリシャの遺跡を思い出した。

「すごい……」

僕が思わずつぶやくと、横に座っていたシエアが得意そうにほほ笑んだ。

「この地は……いや、このアイオリアから北のチュートニア、東のアデイスに至るまで、かつてテラスティアという巨大な国が支配していたんだ。アエロポリスはそのテラスティアの遺跡の上につくられた街だ。だから今でも千年前の雰囲気を残している。ほら、街の周りにもいくつか遺跡が見えるだろ？」

普段は無口なシエアが、急に饒舌に話したので、僕は驚いてしまった。

でも、見れば確かに、街の周りに遺跡のようなものが見える。城壁の周りには、朽ちた神殿の柱や、がれきが散乱している。その遺跡群と、現在都に建てられている建物があまり違う点とから、シエアの言う通り、都は千年前の、テラスティアという国の様式を引き継いでいるらしかった。

それにしても……。

シエアの話に出てきた地名、すべて聞いたことがない。僕は本当に、違う世界に来てしまったのだろうか……。

バサツバサツ。

落ち込んでいると、聞き覚えのある羽音が頭上に響いてきた。

ドラゴンだ！

つい先ほど僕たちを苦しめたあのドラゴンが、都の上空を飛んでいた。

「まさか都を襲う気！？」

「もうそれほどの体力はないと思うが……見つからない方がいいな」
シエアとそう話した時、目の前で信じられないことが起こった。
突然、ドラゴンが飛んでいる付近だけが曇りだしたのだ。

そして雲の合間から閃光が走り、雷の筋がドラゴンに命中した。

あつという間に黒焦げになり、墜落していくドラゴン。
突然の出来事に、僕もシリアも何が何だか分からなかった。

「魔法だ……」

シリアがつぶやいた。

「大きな街には魔法を使える神官がいるんだ。きっと、都の神官が、
雷の魔法で倒したんだろう」

魔物や魔界が存在するくらいだ。魔法と聞いても、もはや驚かな
かった。

でも、すごいな。

弱っていたとはいえ、あんなに強いドラゴンを一撃で仕留めるな
んて！

ドラゴンの末路を見届けてから、僕たちは再び都を目指しトリプ
スを歩ませた。

いよいよ『 pneumaの鏡』のある、都へ。

それを壊せば、母さんをロバートから取り戻してもらえる。

本当に、そんなことができるんだろうか？

仮にできたとして、僕は無事に元の世界に帰ることができるんだ
ろうか。

胸にあるのは、不安か、期待か。

一歩一歩都に近づくと、僕は、胸の鼓動が早まるのを感じてい
た。

第八話 王宮へ

シーアの予想は当たっていた。

都の上空を飛ぶ魔物を仕留めたのは、都の神官、アーサー・クロアであった。

水色の髪を緩く束ね、白い上着を羽織っている。

「全くどうなっているんでしょうね、都の警備は……」

「アーサー様、お一人で倒すなんて無茶なことを……」

付き添いの兵士が、心配そうに言った。

兵士の手には、神官が集めた薬草が持たされている。

「あんなの雑魚ですよ。どういうわけか手負いでしたし」

神官は、手近に生えていた薬草を採った。

「おっと。早く王宮に戻らないと王様に叱られちゃいますね」

通りを馬車が行く。市場から商人たちの声が聞こえてくる。

肩に大きな袋を担いだ旅人、干し草を積んだ車を引くロバ、腰に剣を差した鎧の兵士。

本の中に出てくるような街の光景に、僕はただ啞然としていた。

城壁の門をくぐり、都に入った僕たち。

あの女の子に借りたトリプスは、街の外に置いてきた。シーアが森に戻るときに、返してくれるそうだ。

「向こうに見えるのが居住区。右奥に見えるのが大神殿だ。そして……」

シーアが言うよりも先に、僕はつぶやいていた。

「あれが……王宮」

街の最深部に、飛びぬけて大きな建物がそびえたっている。遠くから見たときよりも、はるかに大きい。

白大理石の柱で支えられたその建物に、たくさんの人が出入りしているのが見えた。

兵士らしき姿も見える。

「じゃ……俺はこれで」

「えっ」

僕は思わずシーアの方を見た。

そっだ。都まで連れて行ってもらう、っていう約束だったもんな。都に着いたら、もうお別れだ。

でも……。

「品物売るところまで手伝うよ！ ほら、仕事手伝うって言ったし！」

無理に頼んで都まで連れてきてもらったんだ。このまま別れるのは何だか悪いような気がした。

しかし、彼は軽く追い払うような仕草をして、言った。

「いーよ別に。それより王宮に用事あるんだろ？ 早く行けよ」

「うん……。ありがとう、シーア」

シーアは軽く肩をすくめてみせた後、踵かかとを返し、さっさと反対方向に歩き始めた。

もともと人間嫌いだって言ってたくらいだ。彼らしく、実に淡白な別れ方だった。

でも、もう二度と会えないかもしれないのに……。

ちよっぴり寂しい気持ちになりながら、王宮に向けて歩き出そうとした時だった。

「あっ。そっだ」

シーアが、ふと思いついたように、こちらを振り返った。

「持ってけ」

腰のベルトから何かを取り出し、こちらに向かって投げる。

取り落とさないように気をつけながら、それを受け取って、手の中を確認すると……。

それは、短剣だった。

複雑な組み紐模様のついた、黒い鞘。

シアーが、あのドラゴンと戦ったとき、使っていたものだ。

「やるよ。丸腰じゃ何かと不便だろ」

僕が、ドラゴンと戦う時、武器がなくて困っていたのを知っているのだろうか。

何か熱いものがこみあげてきて、僕は叫んでいた。

「シアーー！！ いろいろとありがとうー！！ 元気でねー！！」

再び向きを変え、歩きだそうとしていたシアーに向けて、大きく手を振る。

シアーは後ろを向いたまま、そっけなく手を振り返した。

……そして、今度こそ本当に、立ち去って行った。

「さて、と……」

僕は、もらった短剣をズボンのベルトに差し込むと、王宮の入り口へと続く階段が上がっていった。

いろいろあったけど、ついにここまで来たんだ。

あとはプネウマの鏡さえ壊せば……。

王宮に入った僕は、驚いた。

入り口のすぐ先は大広間になっているのだが、そこに溢れんばかりの人がいたのだ。

街の人であろうエプロン姿の人から、旅人らしき人まで、様々な人たちが、王宮の大広間に詰めかけていた。

荘厳な王宮の様子を想像していた僕は、すっかり拍子抜けしてしまった。

どうして王宮の中にこんなに人がいるんだろう。

僕は、近くにいた男に尋ねてみることにした。

見るからに人の良さそうな老人で、僕を見てにっこり微笑んで答えてくれた。

「お前さん、他所から来たのかい？ 王様は毎日この広間にいらっしやっては、ワシらの質問や要望に直接応えて下さるんじや。だから皆、王様に話を聞いてもらおうと詰めかけとるんじやよ」

へえ……。

「あ、ほら。いらっしやったぞ」

老人が指差した先に、それらしき人物が見えた。

周りを兵士に守られながら、一段高くなった場所に立っている。全身をすっぽり覆ったローブに、白いベールという、質素な出で立ちだ。

ベールを目深に被っているので、顔はよく見えない。

王が現れたことで、広間が騒がしくなった。

老人の言った通り、広間にいた人々は一斉に王に詰めより、質問や要望を投げ掛けている。

ここからではあまりよく見えないが、王は動じることなく、ゆったりとした語り口で一人一人に対応しているようだ。

だけど、どうやってプネウマの鏡を探そう……。

この様子だと、とても王に近づけそうにない。

と、その時……。

「あつ！ デューク！ どこに行くんだよ！」

肩にとまっていたデュークが、勝手に飛び立ってしまった。

周りにひしめいている人々を必死にかき分けながらデュークを追うと、デュークは広間の脇にある廊下へ向かったようだった。

勝手に王宮の内部へ入っているのかどうか、一瞬悩んだが、このままデュークを放置するわけにもいかないので、僕は後を追うことにした。

廊下の先は、中庭になっていた。
建物が中庭をぐるりと囲み、回廊になっている。

中庭の真ん中には優美な噴水があり、周囲には豊かに茂った広葉樹が植えられている。

しまった！

中庭に見とれているうちに、デュークを見失ってしまった。

中庭の木の枝にでもまったのか？

そう思つて、植えられた木を見回していると、一人の女性の後ろ姿が目に入った。

その姿には見覚えがあつたが……その時はそれが何なのか、思い出すことができなかつた。

僕はその女性に、デュークを見なかつたか、尋ねることにした。

「あの……」

声をかけると、ウェーブのかかった長い髪を揺らしながら、その女性は振り返つた。

……僕は息を呑んだ。

目を覆い隠してしまうほど長いまつ毛に、すんなりとした鼻、きゅっと結ばれた上品な唇。振り向きざま、ふんわりと良い香りがした。

僕はこれほどまでに美しい女性を見たことがない。

この時の気持ちやなんと表現したらいいんだろう。

僕は、一目で彼女のとりこになってしまった。

その女性は、なんとも変わっていた。

髪の色が水色だったのだ。

水色の髪なんて、見たことも聞いたこともない。

しかし、その水色の髪は彼女の美しい顔立ちに違和感なく溶け込

んでいる。

「あのー…何か私に用があるのでは？」

「あっ、すみません！」

いけない、いけない。

彼女に見とれて、声をかけた理由を忘れるところだった。

「黄色い鳥を見ませんでしたか！？　こう、トサカみたいな羽の立った……」

すると、彼女は惚れ惚れするほど美しい微笑みで、答えた。

「それは、この子のこと？」

彼女が軽く手を挙げると、どこからかデュークが飛んできて、彼女の手にとまった。

一体どうなってるんだ？？

「どうもありがとう！」

無事デュークを見つけた僕は、本来の目的を忘れ、木の下に腰かけて、その水色の髪をした女性と“おしゃべり”をしていた。

「僕、エンノイアっていいいます！　あ、こいつはデュークで

ちやつかり自己紹介しておく。

「ふふ。私はルイズよ。よろしくね、エンノイア、デューク」

そう言つて、ルイズは僕の手を握った。

ふわああああ……。なんて柔らかい手なんだろう。

ちなみに、彼女は僕よりもずっと年上のようだ。

ひよつとしたら、母さんと同じくらいの年かもしれない。(母さ

んは僕を十代の時に産んだから、他の家の親に比べたら若い)

でも……。母さんとは全然違う……。

「さてと、そろそろ行かなくっちゃ」

ルイズが立ちあがった。

ペールを取り出し、かぶる。

その様子を見て、僕は電撃が走ったように閃き、無意識にある言葉を発していた。

「もしかして……王……様……？」

ルイズが驚いたように目を見開いて、僕を見ている。自分でもなぜそう思ったのかわからない。

王様はさっき広間にいたじゃないか。

服装も違うし、時間的に考えても、さっき広間にいた王らしき人物がルイズだとは思えない。

それなのに、直感とでもいうのか、ルイズこそが『王』だ、という気がしてならなかった。

しばらくの沈黙。

僕が変なことを言ったので、怒ったのかもしれない。

僕は、不安になってきた。

しかしルイズは、なんとも気の抜けるような明るい声で言った。

「あら？ どうしてはれちゃったのかしら？」

手を顔に当てながら、いたずらっぽく笑っている。

ええええ！？

そ、それって、どういう……。

すると、彼女はくすくす笑いながら、

「広間にいたのは私のイトコよ。私たち、姿が似ているから、時々ああして代わってもらおうの」

おいおい、王様がそれでいいのか……。

僕はすっかり気が抜けてしまった。

いいや。気が抜けている場合じゃないぞ。

ルイズが王様とわかれば、やるべきことは一つ。

僕は、意を決して聞いた。

「プネウマの鏡を見せてください……！」

第九話 プネウマの鏡

「プネウマの鏡を見せてください……！」

アイオリアの王を前にして、僕は頼んだ。

プネウマの鏡を壊せば、母さんを取り戻せる。今はただ、そことだけが、頭にあった。

「いいわ」

意外にも、アイオリアの王、ルーズは、こともなげに答えた。

しかし、気のせいだろうか……。彼女の表情が、少し曇った気がするのは。

心なしか、彼女の目が、僕を哀れんでいるように見えた。

ルーズに付き従って、王宮の廊下を進む。

いくつもの廊下と階段を通り、最上階の、最も奥にある部屋へと辿り着いた。

部屋の前には、二人の兵士が控えている。他の兵士たちと同じように、モヒカン頭のヘルメットを被り、腰に差した剣の他に、手には槍を持っている。

「陛下！ もうお戻りですか？」

「ええ、通してちょうだい」

兵士たちは初め僕をいぶかしんだが、やがて道を開けた。

植物の蔓が描かれた優美なデザインの扉が、兵士によって開かれる。

扉を開けると、中は体育館のように大きな部屋が広がっていた。

王宮の正面と同じように、この部屋にも壁面や柱に植物の蔓が巻き付いている。

部屋の入り口から見て左側には大きなバルコニーがあり、春の陽

が皆さんと射し込んでいた。そして、右側には……。

聞かなくてもわかる。プネウマの鏡だ……。

二メートルほどもある大きな姿見。鏡の縁には奇妙な文様が彫り込まれている。

何かが映っているようだが、ここからではよく見えない。

「この鏡は、この世と魔界を隔てているのよ。この国にとってなくてはならない物なの」

ルイズが話し出した。

「だから……」

ルイズは僕の目を見て、静かに言った。

「誰かに壊されでもしたら、大変なことになるわ」

「!!!」

僕は、心臓が飛び上がるほど驚いた。

知っているのか……？ 僕がこの鏡を割りにきたことを。

目の前が真っ暗になる。緊張と恐怖で息ができない。

バレていたんだ、始めから……。

さっきまでは美しいと思っていた彼女の姿が、恐ろしい魔物のように歪んで見えた。

「 丈夫？ 」

「 え……？ 」

「 大丈夫？ 顔が真っ青よ 」

気がつくくと、ルイズは僕の肩に手を乗せ、心配そうに覗き込んでいた。

別段、怒ってはいない。どこか悲しそうに見えること以外は、さっきまでと変わらないようだった。

そ、そうだ、落ち着け。まだバレたとは限らないじゃないか。

改めてルーズの方を見ると、相変わらず綺麗な、優しい顔で、魔物なんかではなかった。

「もしも……もしもこの鏡が割れたら……どうなるんですか？」
怪しまれぬよう、慎重に尋ねる。自分でも声が震えているのが分かった。

「魔界が現世にまで広がり、今まで以上に魔物があふれかえるでしょうね。そして人間も動物も、魔物に食われてしまうでしょう」
そんな……。

僕は悩んだ。

そんな大事になるなんて。僕はただ、母さんを取り戻したいだけなのに……。

一瞬にして、記憶がさかのぼる。

閑静な住宅街に建てた、庭のついた、大きな家。

父さんだって、昔は優しかった。休日はよく三人で出かけたものだ。

近所でも仲のいい家族として有名だった。

ある日、父さんは怪我をして、仕事を失い、その日から生活は一変した。

僕らは安いアパートに引っ越し、母さんも仕事を始めた。

それでも、三人が一緒なら、僕も母さんも満足だった。

しかし父さんは違ったようだ。

職を探そうともせず、酒ばかり飲み、毎日、夜の街を遊び歩いた。母さんと喧嘩が絶えなくなり、暴力をふるうようになった。

母さんは毎日帰るはずもない父さんの晩ご飯を作っては、泣きな

がら捨てていた。

もう、母さんにそんな思いはさせたくないんだ。
母さんはばかだから、優しくすぎるから。
僕が守らなきゃいけないんだ……。

不思議なことに、ルイーズは黙ったままの僕を
どこか悲しそうな表情で　　ずっと見守っていた。

ここは僕の住んでいる場所とは違う世界だ。何が起きたって、僕には関係ない。
そうだ。

大変なことになる前に逃げればいいんだ……！

ついに、僕は決心を固めた。

その時、ルイーズが再び『大丈夫？』と聞きながら僕に近づいてきた。
ドンッ！

僕は彼女を軽く突き飛ばし、目の前に置いてあった椅子に手をかけた。

そう、これで鏡を割るのだ。
プネウマの鏡に近づき、手に持った椅子を大きく振りかぶる。そうして、椅子を鏡に向けて放り投げた。

いや、放り投げようとした。
しかし、それはかなわなかった。
驚くべきことに、気がついてしまったからだ。

「僕が……映ってない！！　周りの景色は映ってるのに僕だけ……

ルイズが言った。

「試すようなことをしてごめんなさい。あなたがどんな人間か、知りたかったの。ほんとはね……」

ルイズは僕が落とした椅子を拾った。そして、なんと鏡に向かってそれを投げたのだ。

鏡が割れる！

衝撃に備えて目をつぶろうとした時、鏡から光のようなものが出て、大きな音と共に、椅子を弾き返した。

僕は、慌てて鏡の表面を触る。当然ながら、傷一つ付いていない。

「プネウマの鏡はそう簡単には壊れないわ」

彼女はそう言うと、振り向いて、微笑んだ。

「申し訳ないけど、プネウマの鏡を壊せば願いが叶うというのは嘘よ」

僕は、はっとしてルイズを見た。

どうしてルイズがそのことを……。

ルイズが軽く手を上げると、先ほどと同じようにデュークが飛んできて、彼女の手にとまった。そして彼女はデュークを肩に乗せると、おもむろにことの真相を語り始めた。

その時のルイズは、今までのようなやんわりとした雰囲気ではなかった。意志の強そうなその表情は、まさに女王と呼ぶべき威厳に満ちたものであった。

「私は、アイオロスにあなたを連れてくるよう頼んだの。そして、私はあなたを試した。今のところ、合格と言えるわ」

「どうしてそんなことを……」

ルイズは、大きく息を吸うと、僕の目を見て、静かに、ゆっくりと言った。

「あなたが、この国の新しい王だからよ」

僕の新しい運命が、今、始まろうとしていた。

第十話 闇よりの使者 part 1

「え……?」

アイオリアの王、ルイズが語ったのは、信じられない言葉だった。

僕が『この国の新しい王』……?」

「それってどういう……?」

こと、と言いかけた時、ふいにカタカタと物音が聞こえ始めた。机の上のせられていた花瓶が、音を立てて震えていたのだ。

「!?!?」

ガシャアアアーン!!

ついに、花瓶は机から滑り落ち、割れてしまった。

途端、空気が淀む。妙な圧迫感で、息が詰まりそうだ。

ルイズの表情から、緊張が見てとれる。何か、禍々しい事態が起こっているのだということは、僕にもわかった。

突然、バルコニーからものすごい風が吹き付けた。

思わず目を閉じる。

風がおさまったところで、薄目でバルコニーの方を確認すると、どこから入ったのか、黒いローブを着た男が立っていた。

その男を見た瞬間、僕は恐怖で凍りついた。

目はフードで隠されているが、まるで生氣のない顔。ローブから覗いた手は、妙に青白く、不自然に節くれだっていた。

「面白いものを見させてもらったよ」

男が口を開いた。耳に残る、ざらついた不快な声。

ルイズは男を見るなり、顔をこわばらせ、叫んだ。

「バイバルス……!!」

バイバルスと呼ばれたその男は、神経を逆撫するように、ククと笑った。

「覚えていて下さって光栄です、陛下」
わざとらしくお辞儀をする。

会話の様子から、ルーズと男は面識があるようだった。それが決して好意的な関係でないことは、一目瞭然だ。

「近頃、魔物に町や村を襲わせているのはお前ね、バイバルス！
一体何が目的なの！？」

男は、なおもからかうように笑い続ける。

「あのお方がもっと多くの魂を集めよ、と仰るのでね……」
ルーズの美しい顔が、怒りで歪む。

「ここはお前のような者が来る場所ではないわ！ 早々に立ち去りなさい！」

ルーズは、大きく右手を振りかざした。すると驚くべきことに、何もない手の中から、巨大な炎が放たれた。

「魔法！？」

僕は叫んだ。

そうだ！ これこそが、シアアが言っていた『魔法』に違いない。
文字通り、ルーズは何もない空間から炎を生み出したのだ。

放たれた炎は、ローブの男めがけて一直線に飛んでいった。

しかし、男は全く動じる気配がない。

そして、炎が男を包み込もうとしたまさにその時……！

ガキイイイイン！！

まるで、男の周りに見えない壁があるかのようなだ。炎はバリアの
ようなものに弾かれ、あとかたもなく消えてしまった。

男は火傷一つ負っていない。

この状況を楽しんでいるのか？ 不気味な笑みを浮かべながら、
言った。

「いやいや、相変わらず貴女の魔力は素晴らしい。だが……」

男はどこからともなく杖を取り出した。本の中の魔法使いが持っているような、先の曲がった木の杖だ。

「今の私にはかなわんよ!!」

叫ぶと同時に、男は杖から炎を放った。

何もない空間から炎を生み出したのはルイズと同じだが、男の場合、その炎の規模がまるで違っていた。それは、あの村を焼いたドラゴンの炎に匹敵するほどだ。

僕が立ちつくしていると、ルイズは僕を突き飛ばした。そして、僕をかばうようにして、その炎をもろに受けてしまった。

「キヤアアアアアア!!」

恐ろしい悲鳴。

思わず目を閉じた僕は、その姿を見ることができなかった。

しばらくして、炎がおさまった。

通常の炎なら、こんな短時間に炎が勝手におさまるといったことはないだろうけど。きつと魔法の炎だからだろう。炎は次第に弱まり、部屋には煙だけが残った。

「王様!!」

なんと、ルイズは無事だった。服は無残に焼け焦げているが、肌には煤が付いているだけで、火傷は一切していなかった。

僕は、倒れているルイズに駆け寄った。

よかった。意識はあるようだ。

「直前にバリアを張ったのか。やはりなかなかあなどれん。しかし、その美しい顔に傷がつかなくてよかったよ」

他人事のように話す男。僕は心の底から怒りがわいてきた。

事情は知らないけれど、この目の前にいる男が、とんでもない悪党であることだけは間違いなかった。

僕は怒りのままに、男に向かって叫んだ。

「お前何者だよ!?! どうして王様にこんなひどいことを!! 許

さないぞー!!」

男は全く動じることもなく、むしろ興味深げに僕をまじまじと見た。

「ほう……面白い。お前が新しい王だな？ しかもその服装……異世界のものだな」

「!?!」

僕は動揺した。

普通、『異世界』などという概念を、容易に理解できる人間がいるだろうか？ 実際に『異世界』と思われる場所へ来てしまった僕でさえ、信じられないのに。

しかし、この男はいとも簡単に僕が違う世界から来たことを見破ったのだ。

その時、倒れていたルーズが、僕の名前を呼んだ。

「……げて」

「え？」

「逃げて……!」

ルーズの悲痛な叫び。

僕は叱りつけるように、言った

「逃げません！ 王様を置いていけるわけないでしょう!?!」

この女性むすめが僕にとって敵なのか、味方なのか、まだわからない。

ひとを勝手に試したり、違う世界に連れてきたり。ひどいと思う。

それでも今は、この女性むすめを守らなければいけない。

なぜだかわからないけど、僕は、そう思った。

第十一話 闇よりの使者 part 2

男はすでに、次の攻撃に取りかかっていた。

「誰が王になろうと同じ事……私の邪魔はせん!!」

男から、無数の黒い糸のようなものが飛び出した。

その糸はルイーズをしばりあげると、彼女を高々と持ち上げた。巻きついた糸が、彼女の腕や胸を痛々しく締め付けている。

僕はルイーズを助けようと、走りだした。

しかし、一瞬ふわりと浮きあがる感覚がしたと思うと、みるみる床が遠ざかっていった。

「うわあああ!?!」

いつの間にか僕の足にも糸が巻きついてたようだ。右足に巻きついた糸で持ち上げられ、僕は、逆さまの状態で、宙づりになってしまった。

当然、全体重を支えることになってしまった右足。足の付け根が、引き裂かれそうなほど痛んだ。

「何するんだよ!! 放せよ!!」

男は全く見向きもしない。

「バイバルス、エンノイアを放しなさい! その子は関係ないはずよ!」

「さてね。それはどうか。この少年はいずれ王になるのであるろう?」

男の声のトーンが変わった。

「ならば……今のうちに始末しておいた方が都合がいい」

「うあ……っ!」

男が言つと同時に、巻きついた糸が足に食い込んだ。強烈な痛みが走る。

「まずい。このままじゃ、本当に殺される……!!」

母さんの顔が浮かんだ。
お願いだ。せめて、もう一度だけ、母さんに会いたい。
だから、それまでは死にたくないんだ……！

「ピピッ！」

デュークが、心配そうに僕を見ていた。
しかし、残念なことに、鳥であるデュークにはどうすることもでき
ないようだ。

「ごめん……。僕、もうだめかもしんない……」

僕は、デュークに言った。

コッソ。

デュークは、クチバシで僕のズボンのベルトをつついた。
コッソコッソコッソ。

注意を引くように、何度もつつき続ける。

「何だよデューク。ベルトがどうかして……」

僕ははっとした。

そうだ！ シーアにもらった短剣！

王宮へ入る前。シーアは、丸腰では不便だろうということで、僕
に短剣をくれた。

その短剣を僕は、ズボンのベルトに挟んでいたのだ。

僕は、男を見た。

ルイズと何か会話しているようで、今は僕の方を見ていない。

僕は気付かれないように、慎重に手を伸ばした。

逆さまの状態で腰に手を伸ばすというのは、かなり根気のいる作
業だったが、ようやくベルトに挟んだ短剣に手が届いた。

そっとその短剣を鞘から抜き取る。

剣を持つことなど、初めてだ。

抜き取った瞬間、手にずしりと重みが伝わった。

僕は初め、その短剣で糸を切ろうと思った。

しかし、この姿勢で足に巻きついた糸を切るというのは、到底無理な話であった。

そこで僕がとった行動は……。

男に向かって、その短剣を勢いよく投げることだ。

ヒュンッ！

ドラゴンを射るのには失敗した僕だったが、今度は上手くいった。短剣は風を斬りながら、真っ直ぐに男の方へと飛んでいった。

男は慌てて振り向くと、先ほどと同じようなバリアを張った。

そしてそのバリアに、短剣ははじき返されてしまった。しかし成果はあった。

突然のことに、男はひどく動揺したようだ。

そのせいなのか、一瞬僕に巻きついていた糸が緩んだのだ。

僕は足を振りまわし糸から抜け出した。

「しまった！」

男が叫ぶ。

高いところまで持ち上げられていたので、糸から抜け出した瞬間、床に激しくたたきつけられた。

しかし、痛がっている場合ではない。僕はすぐさま入り口のドアへと駆けた。

ドアに手をかけたところで、ふと思案し、僕は男とルイズのいる方へ振り返った。

「王様ー！！ 必ず助けるからねー！！」

僕はルイズに向かって叫んだ。

見捨てるんじゃない。見捨てるんじゃないんだ。

「ただ今この僕は、ここにいても、どうすることもできない。
だから……どうする？
どうすればいい!？」

「エンノイアー!！」

その時、ルイーズが僕の名前を呼んだ。

「エンノイアー！ リュクルゴス隊長を呼んで！」

「え!？」

リュクルゴス隊長って誰……!？」

「広間にいるはずよ！ お願い……リュクルゴスを……リュクルゴス隊長を呼んで!！」

「わ、わかった!！」

それが誰なのか、その人を呼んだらどうなるのか、わからなかったが、とにかく僕は部屋の外へと走った。

「ほう。その隊長とやらが来るまで待っていてやるうではないか」
男は不敵に笑った。

「……後悔するわよ」

それに対抗するように、ルイーズは強気な笑みを浮かべた。

第十二話 リュクルゴス隊長

> i 3 5 5 9 7 — 3 7 8 1 <

「リュクルゴス隊長！！ 助けてください！！ リュクルゴス隊長
ーっ！！」

声の限りを尽くして、僕は広間の入り口で名前を呼んだ。広間に
いる人々が、驚いて振り返る。

「リュクルゴス隊長ーっ！！」

ローブの男から辛くも逃げ出した僕は、「リュクルゴス隊長」を
呼ぶために、この大広間へと戻ってきた。幸い邪魔をされるような
ことはなかったが、広間を目指し走る僕が目にしたのは、恐ろしい
光景だった。

見張りの兵たちが、扉の前で見ても無残な状態で死んでいたのだ。
骨が折れているのか、不自然な格好でぐったりしていた。

おそらくあの男がやったのだろう。よく見ると、死んだ兵士たち
の体には先ほどの黒い糸が巻き付いていた。

僕は、悪寒がした。

こんな騒ぎになっているというのに、兵が誰も駆けつけないとい
うのは、どおりでおかしいと思った。

早くしなければ、ルーズが危ない……！！

「リュクルゴス隊長ーっ！！」

もう何度目になるかわからない。さすがに声がかすれてきた。と、その時……。

「どうしたボウズ!?」

突然、肩に手が置かれた。声の主を見上げると、黒髪の、がっしりとした男であった。長いマントを羽織り、腰には剣を差している。

そうか！ この人が……！

「リユクルゴス隊長!?」

「自分がそうだが……」

「王様が大変なんです！ ロープの男が現れて……！」

男の言葉を待たず、僕はルイーズの窮地を必死に伝えた。

リユクルゴス隊長はひとつうなずくと、すぐさま数人の兵士を引き連れ、ルイーズのいる部屋へと向かった。僕も慌ててついて行く。

リユクルゴス隊長と兵士たち、そして僕は、バタバタとルイーズのいる部屋へと入った。扉は僕が隊長を呼びに行く時に開けたままになっていた。

「陛下ーッ！」

「王様ーッ！」

糸に縛られ、不自然に空中に浮かんだルイーズ。首をもたげてぐったりしていた。

ま、まさか……。

僕や兵士たちも、最悪の事態を考えた。

「大丈夫……。気絶しているだけだよ」

僕たちの考えを見透かしたかのように、ロープの男は言った。

その言葉が余計に癪に障ったようで、リユクルゴス隊長は顔を真っ赤にして男を睨んだ。

「貴様ッ！ 陛下を離せ！」

「残念ながらそういうわけにはいかんね。力づくで取り戻したらどうだね？」

リユクルゴス隊長はスラリと腰の剣を抜くと、真っ正面から男に

向かっていった。

「正面から攻撃するなどバカなことを！」

男から黒い糸が放たれた。

糸が隊長に巻き付こうとしたその時、隊長は大きく剣を振りかぶった。

そしてなんとその剣で糸を叩き切ったのだ！

そのまま勢いよくロープの男を斬る。剣は男の腹をえぐり、刃の先に鮮血が舞った。

「く……くそ……」

男はよろけながら、膝をついた。

ルイズがこの人を呼べと言った理由がわかった。

強い！

僕は、初めて見る本物の剣技に、興奮していた。

第十三話 恋人

「あっ！ 落ちる！」

ローブの男がひるんだため、ルイズを縛り、宙に持ち上げていた糸が緩んだ。当然、ルイズの体は重力に従って落下し始めた。僕の声を聞かぬやいなや、リユクルゴス隊長は剣をしまつと、素早く体の向きを変え、落下してくるルイズをしっかりと抱き止めた。

おおおお！

思わず歓声をあげた僕。

つられて、待機していた兵士たちまでが歓声をあげた。拍手なんかしちゃってるし。

「感心している場合か！ さっさとアイツを縛り上げる！」
クスツ。怒られてる怒られてる。

隊長に怒鳴られて、兵士たちはワタワタと、傷を負って倒れているローブの男を縛りにかかった。

「う……」

その時、隊長に抱き抱えられていたルイズが目覚めました。

「陛下！ ご無事ですか！？」

「リユクルゴス！？」

ルイズは、はっとして隊長を見た。

「あなたが助けてくれたのね、リユクルゴス……ありがとう」

あ、あれ？ 気のせいかな。ルイズの頬がほんのり赤く染まったよう……。

すると、リユクルゴス隊長は心底申し訳なさそうな表情で言った。
「いえ……。申し訳ありません、気づくのが遅すぎました。そのせいで陛下を危険な目に……」

ルリーズは慌てて首を振った。

「いいえ！ こうして助けてくれただけで充分よ。よくぞ来てくれました」

リユクルゴス隊長はくしゃっと笑った。

「そりゃ、貴女のためなら地の果てだって助けに行きますよ」

「リユクルゴス……」

ルリーズの頬が一層赤くなったように見えた。

リユクルゴス隊長はルリーズを優しく下ろすと、先ほどの炎のせいで服が焦げ、白い肌があらわになってしまったルリーズに、慣れた様子で自分のマントを着せてあげた。

隊長を見つめるルリーズの目は、母さんがロバートを見る時のそれに、よく似ていた。

なんだ、そういうことが……。

僕は、わかってしまった。そう、この二人は……。

そう思った途端、さっきまで興奮していたのが、なんだかモヤツとした気持ちになった。

それから、胸がチクチクしてきた。

所在なくて、二人の側を離れようとした時、ルリーズに声をかけられた。

「ありがとうエンノイア」

「そんな。僕は何もしてないです」

「何もだなんて。あなたは私を見捨てなかった。そして、リユクルゴス……隊長を呼びに行ってくれた。すべてあなたのおかげよ」

僕は首を振った。

「いえ、そんなの全然大したことじゃありません。僕は……その……隊長さんみたいに強くないし……」

「え？」

ルイーズはなぜそこで隊長が出てくるのかわからないといった感じで、小首を傾げた。突然引き合いに出されて、隊長も驚いているようだった。

ああああ……僕は何を言ってるんだろう。

なんだか恥ずかしくなつて、僕はそそくさとその場を離れた。

リユクルゴス隊長はルイーズをかばうようにして立つと、兵士によつて縛られたローブの男に再び剣を突きつけた。

「貴様、何者だ？ 陛下を傷つけた罪、万死に値するぞ！」
隊長は毅然として言い放った。

こんな状況になつても、ローブの男はククク……と笑っている。血が出ているというのに、痛がる様子もない。

「何がおかしい！」

すると、ローブの男が言った。

「私が何者か……。王様の方がよくご存知なのでは？」
そこにいた人々が一齐にルイーズを見る。

ルイーズは厳しい顔でうなずき、説明を始めた。

第十四話 闇に蠢く者

「この男はイスマイル・バイバルス。……かつてこの国の政治家だった男よ」

ルイズは、このローブの男について説明を始めた。その内容を要約するところだ。

ルイズとこの男はかつて大学の同級生だった。二人は友人で、毎日、理想の国のあり方について語り合っていた。そして同じ理想を持って、この王宮へ入った。

しかし……ルイズとバイバルスの考えは次第に食い違っていた。ルイズは他民族との調和を望み、国内の安定を目指したのに対し、バイバルスはテラスティア 昔このアイオリアを含む広大な大地を支配していたという王国（シーアが話していた）の再建、すなわち国土拡大を望んでいた。

当然ルイズはその考えを断固拒否した。しかし自分の望みがかなわないと知るや、バイバルスは不穏な動きを見せるようになった。今度は魔界に傾倒し、国内で禁止されている怪しげな魔術に凝るようになったのだ。

それでルイズはバイバルスを国から追放した……。

それが、この男とルイズとの因縁だ。

ちなみにリukulゴス隊長はそのころ王宮にはいなかったのだから、バイバルスとは面識がないらしい。

「それで、陛下を襲った目的は何なのだ？ 追放された復讐か？」

リukulゴス隊長が、剣を突きつけたまま、目の前のローブの男・バイバルスに聞いた。

バイバルスは急に笑うのをやめ、ぞつとするような低い声で答えた。

「貴様らには理解できん。崇高な目的のためだ」

隊長とルイーズは何かを話し始めた。

僕はそろそろ退屈し始め、辺りをうろうろしていた。と、ふと縛られているバイバルスの手元を見ると、ロープの袖に何か光る物が見えた。

何だ……？ 金属みたい……。いや、短剣だ！

僕がさっき投げた短剣を、コイツはこっそり袖に忍ばせていたのだ。

「隊長さ……」

隊長にそのことを伝えようとしたが、時遅し。隊長が振り返った時、バイバルスは器用にもすでにその短剣で手首のロープを切っていた。そしてすぐさまその短剣を持つと、ルイーズに向かっていった。

「キヤアア！」

一瞬の隙を突かれた。強盗なんかがよくやるように、バイバルスはルイーズの喉元に短剣を突き付け、彼女を人質に取った。

「誰も動くな！ 動けば王の命はないぞ！」

「クツ……」

隊長含め、誰一人動くことができなかった。

バイバルスはルイーズを連れたままバルコニーに出た。そしてバルコニーの手すりに上ると……そのまま飛び降りてしまった！

「なっ！？」

兵士たちが一斉にバルコニーに駆け寄る。僕も慌ててバルコニーに出た。

ここは三階だ。ルイズを抱えたままで、普通に着地するというのは難しいだろうが！？

下を見下ろそうとしたちょうどその時、彼方から耳慣れた羽音が聞こえた。

ワイバーン！

都に来る途中に戦ったあのドラゴンと同じ外見をした魔物が、こちら目がけて飛んできた。そして素早くバイバルスとルイズを背中中に拾い上げると、再び彼方へと飛び去ってしまった。

そう、ルイズは連れ去られてしまったのだ。

第十五話 救出作戦

ルイズがさらわれた後、僕たちは広間へと戻った。僕は広間の隅にある椅子に腰かけながら、考えていた。

僕をこの世界に連れてきたのは、ルイズであった。そして、ルイズは連れ去られてしまった。かつてルイズの友人だったという男、イスマイル・バイバルスによって。

あの瞬間、僕は目の前で一国の王が誘拐されたということに気が動転していて、それについて深くは考えていなかった。しかしこうして落ち着いてみて、初めて事態の深刻さがわかった。

僕は、元の世界に帰れなくなったのだ。

ルイズがいない今、なぜ僕がこの世界に連れて来られたのか、その理由を知る術もなかった。

そして、僕はこれからどうすればいいのだろうか？

生きていかなければならないのか？ この見知らぬ世界で？ 魔物や凶暴なモンスターに満ち溢れた、この世界で？ 母さんとも一度と会えないまま……。

知らず涙が零れた。

突然すぎる。あまりに突然すぎるよ……。

「大丈夫か？」

もたげていた頭にコッソ、とコップを当てられた。見上げると、そこにはリユクルゴス隊長が立っていた。彼は手に持った飲み物を僕に差し出し、心配そうに僕の顔を覗き込んだ。

「陛下のこと、知らせてくれてありがとな。怖かったろう」

そう言って、隊長は僕の頭に軽く手を置いた。わっと泣き出しそうになるのを、僕は必死でこらえた。

ルイーズがさらわれた時、一番動揺していたのはリユクルゴス隊長だった。がつくりと膝をつき、自分自身の愚かさを罵っていた。それが今では冷静さを取り戻し、僕を気遣ってくれている。

「すみません……。あの短剣を投げたのは僕なんです」

そう。僕がルイーズがさらわれる原因を作ったのだ。あの時、短剣を拾ってさえいれば……。

「いいや、それはお前のせいじゃない。ちゃんとそういうことを確認しなかった俺や、兵士たちの責任だ」

リユクルゴス隊長は気を取り直すように、笑って言った。

「そういえば自己紹介がまだだったな。もう知っているかもしれないが、俺はリユクルゴス・ヘイロウタイ。こう見えても討伐隊の隊長だ」

リユクルゴス隊長は、黒の長い髪を後ろで一つに束ね、額にはバンドナを巻いている。いかにも軍人らしく、がっしりとした体には、皮でできた鎧を装備していた。歳は三十前後といったところだろう。「僕はエンノイア・グノーヴァーです」

よろしく、と言いかけた時、広間で歓声が上がった。

見ると、広間で兵士たちが一様に整列していた。兵士たちの前には、中年の軍人が立ち、その男が「陛下を救出するぞ！」と一声叫ぶと、兵士たちが一斉に賛同の声を上げた。

僕は驚いてリユクルゴス隊長に尋ねた。

「助けに行くんですか！？ 王様を！？」

「ああ、勿論だ。陛下は恐らく魔界に連れて行かれたのだと思うが、助けられる可能性がなくなっただけではない。すでに執政官から救出の命令が出ているしな」

そうか！ その選択肢があっただんだ！僕は、まだルイーズを救

えるかもしれない、ということをし、すっかり失念していた。

「じゃあ、俺はそろそろ行かなきゃならん。エンノイア、大丈夫か？ 一人で帰れるか？」

「大丈夫です！ ありがとうございます、リユクルゴス隊長！」
僕が元気を取り戻したことに安堵したリユクルゴス隊長は、整列している兵士たちの前に歩み出た。

「諸君。我らはこれより国王代理、執政官閣下の命によりて、国王陛下救出の任に就く。敵は魔界に通ずる非道の魔術師、イスマイル・バイバルス。だが同志たちよ、恐れることはない。我らアイオリア軍が力を合わせれば、恐れるものなど何もない。各々、心してかかるがよい……！」

そう言つと、リユクルゴス隊長は自らの剣を掲げた。兵士たちも同様に剣を掲げ、鬨とぎの声をあげた。

広間の窓から差し込む光を受けて、無数に掲げられた兵士たちの剣が、きらきらと輝いていた。

第十六話 アイオロス

「デューク」

椅子から立ち上がった僕の側に、デュークがおずおずと近づいてきた。

僕はデュークの目を見て、静かに言った。

「いや……アイオロスと呼ぶべきかな？」

『アイオロス』と呼ばれて、デュークはたじろいだ。

もう、僕には分かっていた。こいつはただの鳥じゃない。

こいつの名前はアイオロス。ルイズのペットだか何だか知らないけど、こいつが僕をこの世界に連れてきた張本人（鳥？）だ。

こいつはルイズに頼まれて、僕をこの世界へと導き、時には手助けし、時には僕の力を試しながら、僕をルイズと引き会わせた。今まで聞こえていた声は、こいつの声だったんだ。でもそれは、心に語りかけるような感じで、直接話せるわけじゃない。こちらから声を聞こうとすることも無理だ。

「そうだろ？」

そう聞いても、デュークはいかにも鳥らしく、小首を傾げただけだった。

この世界に連れてきてしまった責任を感じてか、それとも正体がばれたせいかわからない、今のデュークはどこか僕におびえているようだ。

元の世界に帰れなくなって、悲しいし、悔しい。さっきまでの僕なら、デュークを罵って、ひつつかんで、投げ飛ばしていただろう。でも、ルイズが助けられるかもしれないとわかって、僕の心は少し変わっていた。

僕はデュークに言った。

「一緒に行こうよデューク。もう怒ったりしないからさ」

ピイツ！

デュークは嬉しそうに一声鳴き、僕の肩にとまった。

「で……これからもデュークって呼んでいい？」

デュークは頷くように、うんうんと首を振った。

ふふ。可愛いやつ。

そうして、僕はデュークと共に王宮を後にした。

リユクルゴス隊長率いるアイオリアの兵士たちは今しがたルイズの救出に向かった。

え？ 僕はどうするかって？

勿論黙ってルイズが救出されるのを待つわけじゃないよ。

街の外に出ると、そこにはまだリユクルゴス隊長たちがいた。長旅になるのだろう、たくさん荷馬車も用意してある。

僕は気付かれないように、そっとその一つに乗り込んだ。

「よーし！！ しゅっぱーっ！！」

掛け声とともに、馬車が走り出した。

ハアアアア。今日は本当にいろいろなことがあった。

草の上を走る車輪の振動を感じながら、僕は荷馬車に積まれた木箱にもたれて、心地よい眠りに落ちていった。

第十七話 二人の隊長

突然の衝撃に驚いて、僕は目を覚ました。

目を開けてもなお暗かったので、一瞬頭が混乱したが、すぐに自分の置かれた状況を理解した。

馬車が止まったようだ。外から声が聞こえてきた。

「よし！ 今日はこちらで夜営だ！」

僕は今、荷馬車の幌の中にいる。ルイズの救出についていくため、こっそり乗り込んだのだ。

もちろん肩の上にはデューク。

「プー！」

「しっ。静かに。見つかつちゃうよ」

グウウウウ。

おっと……デュークには静かにしろと言いながら、僕のお腹は静かではなかった。

「お腹空いたなあ……」

兵たちの晩御飯を用意しているのだろう。どこからか良い香りが漂ってきた。

僕はふと、寄りかかっていた木箱を見た。元からこの馬車に積まれているものだ。

食べ物でも入っていないかな。そう思って木箱の蓋を開けると、残念ながら中に入っていたのは食べ物ではなかった。しかしその中身は、僕にとって空腹を忘れるほど魅力的な物であった。

「剣だ……」

木箱の中には、たくさんの剣が詰められていた。

僕はその一つを手にとってみた。

長さは一メートル弱。ごく一般的な兵が持つような、実に質素な

ものだが、それでも僕は高興奮。シアには短剣を貰ったけど、こんなちゃんとした剣を握るのは初めてだ。

僕はそのときすっかり剣に見とれていた。だから、馬車の幌をめくる人の気配に全く気がつかなかった。

「おい子供！　そこで何をしている！」

「だから違うって言うてるだろ！」

勝手に荷馬車に乗り込んでいたのを見つかってしまった僕。なんと、剣を握っているところを見られてしまったせいで、あらぬ誤解を受けてしまった。

「いいか、もう一度だけ聞くぞ。なぜ我が軍の武器を盗もうとした！？」

盗むだなんてとんでもない！　ただ食べ物を探していたら、箱の中に剣が入っていたから手に取ってただけなのに。

王宮にいた兵士たちと同じように、モヒカン頭のヘルメットをかぶった男が二人。さつきから僕が剣を盗もうとしたと決めつけて、全く聞く耳を持たない。

「何事だ？」

男たちの後ろから、上官らしき人物が声をかけた。その貫禄のある低い声には聞き覚えがあったが、顔がよく見えない。

「はっ。この少年が荷馬車に積んであった武器を盗もうとしておりまして……」

「だから違うってば！」

「どれどれ？」

その上官らしき人物がひょいと顔を覗かせた。

あ、あ、あ！ リュクルゴス隊長だ！

向こうもこっちに気づいたらしい。目をまん丸にして驚いている。一度顔を会わせているため、なんとも気まずい雰囲気になってしまった。

しかし、驚くべきはここからだ。リュクルゴス隊長はオホン、と咳払いをすると、

「あゝ……すまん。こいつは俺が雇ったんだ。剣の数を確認してもらってたんだ」

兵士たちにそう言った。

「そ、そうでありましたか。し、しかしこんな子供をお雇いになられたので？」

「子供にだって雑用くらいできるだろ。なあ？」

そう言っつてリュクルゴス隊長は僕に目配せした。

「は、はい」

僕は促されるまま頷いてしまった。

と、とりあえず助けてくれた……のかな？

「何事ですか」

すると、もう一人、上官らしき男が現れた。

さつき広間で兵士たちの前に立っていた中年の男だ。おそらくリュクルゴス隊長よりは少し年上、髪には少し白髪が混じっていて、くるりとカールしたひげを生やしている。

その男は、リュクルゴス隊長を見るなり、大げさに驚いてみせ、すつとんきような声をあげた。

「おお！ これはこれは、リュクルゴス隊長ではありませんか。うちの兵たちに何か御用ですか？」

リュクルゴス隊長は、男に冷たい視線を投げかけた。

「別に。お宅の兵が私の雇った少年をいじめていたので、助けていたところですよ。では」

どことなく棘のある言い方のような気がする。中年の男は、僕を連れて立ち去ろうとするリュクルゴス隊長に、すかさず声をかけた。「おお、そういえばリュクルゴス隊長！ 話によれば、陛下が敵に捕らえられた時、陛下は名指しであなたに助けを求めたそうですね。広間にいた者があなたの名を叫ぶ少年を見たと言っていましたよ」リュクルゴス隊長の動きが止まった。ゆっくりと男の方に向き直る。

「……それがどうかしましたか？」

男はフハハ、と笑うと、嫌味たらしく自分のひげを撫でた。

「不思議ですなあ。王宮警備を担当している『衛兵隊』の隊長である私でなく、わざわざ『討伐隊』隊長であるあなたを呼ぶとは……」
やや間があつて。

「何か”特別な理由”でもあつたんでしょうか」

男は『特別な理由』という部分を妙に強調して言った。

ええつと、それはつまりどうということだろう。僕にはよくわからなかった。

リュクルゴス隊長は一瞬沈黙したが、やがて肩をすくめて言った。「それは……あなたが頼りにならないからじゃないですか？ 俺に皮肉を言うために、わざわざ仕事をほっぽり出してくるような男は、そりゃ信用ならんでしょ」

男の顔がみるみる真っ赤になつてきた。

リュクルゴス隊長は高らかに笑つて、今度こそ僕を連れてその場を離れた。振り返つて見ると、男は口汚く罵りながら、兵たちにあたり散らしていた。

な、何なんだ一体……。なんだか知らないけど、険悪な雰囲気。

それに、僕はこれからどうなっちゃうんだろう？

第十八話 道中 part 1

> i35599 — 3781 <

「どうだあー？ うまいかあ？」

ペットに餌でもやっているような言い方だ。確かに今の僕は、まるで動物のように、ご飯に貪りついていた。

馬車に乗っていたのを見つかってしまった僕。拳銃、軍の剣を盗もうとしたと勘違いされてしまった。そこで助け船を出してくれたのがリクルゴス隊長だ。しかも、お腹を空かせた僕を見かねて、食事まで出してくれた。

それで、とリクルゴス隊長が話を切り出した。

「なんで剣なんか盗もうとしたんだ？」

思わず咳こんでしまった。やっぱりそうくるか！

「だ、か、ら！ 盗もうとしたんじゃないんです！ 食べ物を探してたら剣があつたから、手に取ってみただけなんです！」

リクルゴス隊長はやれやれ、といった感じで、首を振った。

「じゃ、質問を変えるが、なぜ勝手に馬車に乗り込んだんだ？」

僕は答えた。

「僕も王様を助けたいからです」

「なぜ？」

「王様にもう一度会いたいんです」

「なぜ？」

「王様に聞きたいから」

「何を？」

「それは……言えません！」

矢継ぎ早に繰り返される質問に、思わずべらべらと喋ってしまった

ところだった。

自分は異世界の人間で、この国の新しい王だから、ルーズによつてこの世界に連れて来られた。僕はルーズに「新しい王」の意味と、元の世界への帰り方を聞きたい。

そんな話誰が信じるものか。自分だって信じられないのに。

頭のおかしい子だと思われて、警察（があるのかどうか知らないが）に突き出されたりしたら面倒だ。ここは、話さない方が得策だろう。

リユクルゴス隊長は軽く溜め息をついて、言った。

「まったく……仕方ないな。連れて行ってやるよ」

「ほんと!？」

「お前の意志が固いのはよくわかったよ。ただし、仕事はちゃんとしろよ。そういう名目で助けたんだからな」

堂々といていいということになると、現金なもので、がぜん楽しくなってきた。僕は鼻歌を歌いながら、みんなの食事の準備をしたり、テントを張るのを手伝ったりした。

初めは僕を奇異な目で見ていた兵士たちも、次第に話しかけてくれるようになった。そして、いろいろなことを教えてくれた。

アイオリア軍には二つの部隊があり、それぞれを、「衛兵隊」「討伐隊」という。

「衛兵隊」は主に王宮・都の警備を担当している。特徴はモヒカンの頭のヘルメットに、サンダル。そういえば王宮で見かけた兵士たちも、さつき僕を問い詰めていた兵士たちも、そんな格好をしていたな。古代の王国・テラスティアの服装なんだそう。そしてその

隊長が、先ほどの中年男というわけだ。ヴァシリス隊長というらしい。

もう一方の「討伐隊」は、地方都市の警備と、文字通り魔物の「討伐」を職務としている。近頃はあのワイバーン以外にも、さまざまな魔物が現れては、町々を襲っているそうだ。魔物の襲撃の情報が入れば、近くの都市に駐屯している討伐隊が、それを退治しに行くというわけだ。

僕はあの、ワイバーンに襲われた村のことを話した。しかし、残念ながら今のところ、小さな村などには手が回らないらしい。

それから、討伐隊の服装は特には決まっていない。マントを羽織っている人が多いかな。あとはシャツやチュニツクの上にベスト、あるいは革でできた鎧を着ているといった具合だ。

隊長はリユクルゴス・ヘイロウタイ。今さっき僕に食事を出してくれた、あの人だね。彼もまた他の討伐隊の人々と似たように、シヤツの上に緑色のベストを着て、マントを羽織っている。

変わった苗字ですね、と言うと兵士たちに意味深に笑われてしまったのはなぜだろう。ともかく、リユクルゴス隊長は僕を助けてくれたうえ、非常に気さくな人物だったので、僕は彼のがとても好きになった。

戦争や大きな任務の時は、どちらの隊も駆り出されるそうだ。だから、今ここには衛兵隊と討伐隊の両方がある。

他にもいろいろ聞いたけど、僕に覚えられたのはこれくらい。

そうこうしているうちに、三日が経った。

第十九話 道中 part 2

僕がリクルゴス隊長・ヴァシリス隊長率いるルイーズ救出隊に加わってから、三日が経った日のこと。僕はいつも通り、テントを張る手伝いをしていた。

「ピピ！」

「どうしたのデューク？」

デュークが何か気がついたように、身を震わせた。

「あっ！」

僕の肩に乗っていたデュークが茂みの中に飛んで行ってしまった。

こういう時ってだいたい良くないことが起こるんだよね……。すでに嫌な予感がしていたが、僕は仕方なくデュークを追いかけることにした。

いたいた。

茂みを掻き分けると、思ったより早くデュークを見つけることができた。

しかして僕の予感はずだった。茂みの五十メートルほど先に、山のようにこんもりと大きな「何か」がいたのだ。いや実際にはもう少し離れているかもしれないが、とにかくとてつもなく大きいので、距離感がよくわからない。

その大きな山は、猛烈な勢いでこちらに迫ってくる。

僕は急いでそこらにいる兵士たちに知らせた。すぐさま戦いの準備を始める兵士たち。

ほどなくして、ソイツは僕たちの前に姿を現した。

ひと目でわかった。

牛だ。

とはいえ、自然の牛ではあり得ない大きさであった。闘牛の牛だつて、コイツに比べたら可愛いもんだ。普通の牛の二、三倍の大き

さがあり、それにふさわしい巨大な角まで生えていた。

近くにいた兵士が叫んだ。

「タウロスだ！」

「タウロスって!？」

「牛のモンスターだよ！」

モンスターとは、自然の動植物が月の光を浴びて変化へんげしたもの。

シアによれば、モンスターは魔物と違って、自分の縄張りが侵された時だけ襲ってくるらしい。

この一帯は、コイツの縄張りだったらしい。この牛のモンスターは、頭から湯気が出そうなほど怒り狂っていた。

しかしそこは歴戦の戦士たち。こんなモンスターごときにはひるみもせず、猛然と立ち向かっていった。

我々のキャンプに到達することもなく、あっという間に兵士たちに取り囲まれる牛。

いやはや、当たり前だけど、僕の出番はなさそうだな。すっかり安心して、僕は一足先に料理の支度を始めることにした。

ところで、この世界には当然、マッチやライターなんてものはない。火を着けるのは、いわゆる「火打ち石」みたいなやつだ。

石を金属に打ち付け火花を起こし、それを上手く繊維質の火口ほくちに点火する。後はフーフー。

こんなの歴史の教科書でしか見たことないし、初めは着けられるわけがないと思ったが、実はこれが意外に着けやすい。この国が、乾燥した気候なせいもあるかもね。

三日間練習したお陰で、僕はすっかり火打ち石のプロになっていた。

帰ったら皆に見せて自慢しよう。記念にひとつ持って帰ってもいいかな……。

くだらないことを考えながら、僕はいつもの通りに火を着けた。

「わっ、バカ！」

誰かがひどく慌てた声で、そう叫んだ気がした。

第二十話 道中 part 3

僕が鍋を温めようと火を着けると、突然あたりが騒がしくなった。なんと、火を見たタウロス（牛のモンスター）が興奮し、暴れだしたので。

一気に形成逆転。

タウロスに張り付いていた兵士たちが次々と振り落とされた。

前足を激しく踏み鳴らし、まったく手がつけられない。あわや踏み潰されそうになる兵士たち。

僕は慌てて火を消した。しかし、それが一層まずかった。

何を思ったか、タウロスがいきなりこっちに向かって走り出したのだ。キャンプのテントを踏み潰しながら、こちらへ迫ってくる。

蹄の音が、地鳴りのように響いてきた。

しかし、僕は迫りくるソイツを呆然と見つめながら、一步も動くことができなかった。

ガキイイイイン！！

「ほら、何をぼうつとしてる！ さっさと逃げろ！！」

「は、はい！」

気がつくのと、リユクルゴス隊長が、タウロスを剣で抑えていた。

他の兵士たちも体勢を立て直し、一斉に飛びかかる。

結局、タウロスはキャンプの周囲をさんざん走りまわった挙句、どこかへ走り去っていった。

もうキャンプはめっちゃくちゃ。テントは踏みつぶされるし、馬車は壊れるし。

モンスターが去ったはいいが、僕たちはその後、後片付けに追わ

れることとなった。

「まったく、もう少しで倒せるところだったのに……」

「怪我しちまったよ……」

「隊長はなぜあんな何もわからない子供を連れてきたんだろう」

あちこちで愚痴が聞こえてくる。みんな直接は言わないが、相当、僕や、僕を雇った（ということになっている）リユクルゴス隊長に頭にきているようだ。

あゝあ……。

僕の馬鹿。グズ。役立たず。

せっかく優しくしてくれたのに、リユクルゴス隊長にまで迷惑かけて。役立たず役立たず……。

「どうしたエンノイア。暗いな」

僕が一人、破れたテントを繕っていると、リユクルゴス隊長が声をかけてきた。

「あまり構ってやれなくてすまん。ちょっといろいろと忙しくてな」

「隊長さんが謝ることなんてありません！」

「だいたい忙しいのは僕のせいだし……。」

僕が落ち込んでいるのを察してか、リユクルゴス隊長は励ますように僕の肩をぽんぽんと叩いた。

「みんなの言うことなら気にすんな。失敗は誰にでもあることさ。

次から気をつければいい」

思いがけず優しい言葉をかけられて、涙が出そうになった。

「あの……僕はどう言われてもいいんです。ほんとに迷惑かけたから。でも、僕のせいで隊長さんまで悪く言われてるみたいで……」

リユクルゴス隊長は笑った。

「なんだ、そんなこと気にしてたのか」

「だって……」

「それはお前のせいじゃない。俺はもともと嫌われ者なんだ」

「そんなこと！」

そんなことあるわけない！　こんな優しい人が嫌われ者だなんて。そう伝えても、リユクルゴス隊長は意味深に、ちよつと寂しそうに笑っただけだった。

第二十一話 道中 part 4

「ときにエンノイア。お前、剣は使えるか？」

落ち込んでいる僕を見かねて、励ましてくれたリユクルゴス隊長が、ふいにそんなことを言った。

「っ、使えません……」

リユクルゴス隊長は軽く、そうか、とだけ返した。

ほんとに僕って役立たずだ……。せつかく励ましてもらったのに、ますます落ち込んでしまった。

すると、リユクルゴス隊長は、思いがけないことを言った。

「覚える気はないか？ よかったら後で教えてやるよ」

「ほんとに!？」

それは願ってもないことだ。ルイズがああのローブの男・バイバルスに捕らわれてしまったとき、助けに来たのがこのリユクルゴス隊長だったわけだが、そのときの剣さばきがかつこよかったのなんのって！ そんな彼に、剣を教えてもらえるなんて！

「もちろんお願いします！」

やっぱり、「嫌われている」だなんて、僕を励ますための嘘だったんだな。こんなに親切な人が、嫌われ者なわけないもん。

かくして、僕はそれから数日間、剣の特訓を受けることとなった。

「ほらほら、踏み込みが甘いぞ！」

ほっ。ほっ。

今、リユクルゴス隊長に剣の特訓を受けている真っ最中。隊長の

提案を受けて、僕は仕事の合間に、剣を教えてもらえることになったのだ。

それにしても、信じられないな。向こうの世界じゃ、（当り前だけど）剣なんて見たことも触ったこともなかったわけで。それなのに僕は今こうして、軍隊に混じって、剣をふるっている。

僕が通っている学校の誰一人、こんな経験をしたことはないだろう。

「なかなかスジがいいな。もう少し筋肉をつけた方がいいかな？」
汗をぬぐいながら、隊長は笑って言った。

そう。自分で言うのもなんだけど、僕って結構剣が上手いと思うんだ。元々運動神経いい方だしね。

ただ、隊長が言う通り、力はあるけど強くないかも。

隊長は剣をしまつと、近くにいた若い男を呼び寄せた。

例のモヒカン頭のヘルメットじゃないから、討伐隊の人だな。隊長はその男を指して言った。

「エンノイア、紹介しよう。討伐隊副隊長、ゾアだ。わからないことはこいつに聞くといい」

まだ二十代前半くらいだろう、あどけなさの残る顔をした彼は、この国では珍しく短髪。いかにも若者らしく、日に焼けて、活き活きとしている。

「じゃ、俺はこのへんで。また後でな」

そう言つて、リユクルゴス隊長は仕事に戻つていった。

あとに残された副隊長ことゾアが、よろしく、と手を差し出してくれた。彼と握手をした後、さっそく僕は気になっていることを聞いてみることにした。あまり立ち入ったことを聞いてはいけないと思ひ、リユクルゴス隊長には直接聞けなかったことだ。

「すつごく失礼なことかもしれないんですけど」

「なんだい。何でも言つてごらん」

「リユクルゴス隊長とヴァシリス隊長って、仲が悪いんですか？」
あまりに不躰な質問に、ゾアは少々面食らったようだったが、苦笑いをして、答えてくれた。

「ああ……。残念ながら、事実だね」

「どうして仲が悪いんですか？」

「それにはちよつと込み入った事情があるんだ。アイオリア軍には、『討伐隊』と『衛兵隊』があるのは知っているよね？」

僕はうなずいた。

「それぞれの隊を束ねるのが、リユクルゴス隊長とヴァシリス隊長なわけだが、さらにその二つの隊を統括する、『将軍』という役職が存在する。現在アレキサンダー様がその職に就いていらつしやるが、その方が引退なされれば、当然次の将軍はどちらかの隊の隊長ということになる」

ここまで聞いて、僕はだいたいの予想がついた。だから、次の将軍をめぐつて、仲が悪いというのだろう。

「そう。まあ、実のところを言うと、ヴァシリス隊長の方が、一方的にリユクルゴス隊長を目の敵にしているんだが……。おっと、これは聞かなかつたことにしてくれ」

「それで、結局のところどっちが優勢なんですか？」

「それはまだ何とも言えないな。ヴァシリス隊長の御家は代々、軍の要職を勤めてきた家系で、実力・家柄ともに申し分ない。だが癩癩持ちだし、差別主義だし……。人望があるとは言い難いな。対するリユクルゴス隊長は、特に討伐隊からの支持が大きく、王からの信頼も厚い。……。厚すぎるというべきかな」

僕が首を傾げると、ゾアは声をひそめて、言葉を選びながら言った。

「ほら……。わかるだろ。陛下は隊長に対して、つまりその……。特別に好意を寄せているから、ヘタに昇格させたりすると、よからぬ噂を立てられかねないんだ。陛下が隊長をひいきしている、とかね。実際には、陛下は感情で決めたりなさる方じゃないんだが……。だ

から、誰もが納得できるような大きな手柄がなければ、リユクルゴス隊長が將軍になるのは難しいんだ」

ふうん。わかったような、わからないような。

「それともうひとつ……」

「おおい、ゾア。ちょっと来てくれ！」

ゾアが言葉を続けようとしたとき、リユクルゴス隊長がゾアを呼んだ。

「おっと。おしゃべりが過ぎたようだな。じゃあ、また」
そう言って、ゾアは行ってしまった。

しかし、僕はその続きが気になって仕方がなかった。そこで、僕はその夜、ゾアのテントに行つて、続きを話してもらつことにした。

第二十二話 道中 part 5

もつとリユクルゴス隊長のことが知りたくなつた僕は、その夜ゾアのテントへと向かった。副隊長といえど六人で一つのテントを使っているため、ゾアは、テント内の他の人たちがいなくなつてから、話を切り出した。

「……これは俺から聞いたつて言わないで欲しいんだけど」
話を促すように、僕は何度も頷いた。

「リユクルゴス隊長が將軍になるのを難しくしている一番の理由は、彼が異民族だということなんだ」

「異民族？」

あまり耳慣れない言葉に、僕は思わず聞き返した。

「そう。彼はアイオリア人ではない。このアイオリア島の西に住む、ウタイ族という部族の出身なんだ」

僕ははつとした。

そういえば、リユクルゴス隊長の名前はリユクルゴス・ヘイロウタイ。

ヘイロウ ウタイ。

僕が変わつた名字だというと、周りの兵士たちに笑われたのを思い出した。それから……リユクルゴス隊長の言葉を思い出した。隊長は、自分のことを「嫌われ者だ」と……。

「うん。皆が皆ではないが……ウタイを嫌つたり、バカにしたりする者がいるのは確かだね。それに、十年ほど前までウタイ族とこの国は戦っていたんだ。そのせいで、ウタイを恨んでいる者もいる」

僕は悲しくなつた。あんなに親切で明るい良い人なのに、出身や

立場の違いで、嫌われたり、笑われたりするなんて。

そんな僕を見て、ゾアは付け加えた。

「とはいえ、彼が傑物であるのは確かさ。そんな不利な立場にありながら、若くして討伐隊長となり、今では多くの兵たちに支持されている。そのことがそれを証明しているよ。俺も隊長のことを尊敬している」

リユクルゴス隊長について話すゾアの口調は、本当に誇らしげだった。

学問と宗教の中心地ヒエラポリス。街の中心には、かつてルイズやバイバルスが在籍していたという大学がある。大学といっても、向こうの世界でいうそれとは幾分異なる。この国でいう大学とは、政治家や士官など、将来国の仕事に携わる人々が、学問・政治・宗教・武術などを総合的に学ぶ場所である。ルイズ以前の王は、この大学を出ていることを、登用の絶対条件としたという。

学長を勤めるのは、アイオリアで最高位の司祭。

以上、ゾアの受け売り。

僕たちは首都アエロポリスを出発してから、約一週間かけて、このヒエラポリスへとやって来た。目的はその学長兼司祭様に、魔界への行き方を聞くため。

こんなに仰々しく出発して来たのに、まだ魔界への行き方もわかってなかったなんて……。なんだか拍子抜け。リユクルゴス隊長によれば、魔界に行くのは、それくらい大変なことらしい。

全員で街に入ることはできないので、リユクルゴス隊長とゾア、数人の兵が司祭に会いに行くこととなった。

僕はというと、なんと司祭様が僕に会いたがっているそうで、一緒に街へ入ることとなった。

街の中に入ると、大きささまの神殿が立ち並んでいた。ここは、大学の街でもありながら、宗教の街でもある。歩いているのは神官と、将来を約束された学生たち。陽気な市場の音が響く都と比べると、なんとも厳めしい雰囲気漂っていた。

リユクルゴス隊長に連れられ、ひときわ大きな神殿に入る。控えていたローブの神官に用件を伝えると、いそいそと奥の部屋に入っていた。

控えの間の壁には、神様と思われる絵がたくさん描かれてあった。神官を待つ間、なんとなくその絵を眺めていると、ふと、その中の一つに目が止まった。

それは、一羽の鳥の絵であった。幾重にも分かれた尾は地に届くほど長く、広げた羽はドラゴンの翼のように、この上もなく優美であった。頭の上にピンと立った羽が、何かを思い起こさせた。

そのとき、ゾアが話しかけてきた。

「アイオロスに興味があるのかい？」

「え……アイオロス？」

「アイオロスはこの国の守護神さ。鳥の姿をした風の神なんだ」

僕は自分の肩の上に乗った、デューク 「アイオロス」を見た。

お前ってそんなすごいものだったの！？

しかしゾアは、デュークに全く気を留めていない。デュークがアイオロスだということを、まるで知らないようだ。

「その声を聞くことができるのは王だけ。しかし王でさえその真の姿を知ることができない。アイオロスは普段、仮の姿をしているからね」

僕はどきりとした。またも「王」という言葉。

僕はデューク アイオロスの言葉を聞くことができる。だから「新しい王」って……？

「どうぞ。奥で大司祭様がお待ちです」

しばらくして神官が戻ってきた。

第二十四話 聖地 part 2

ヒエラポリスの司祭に、魔界への行き方を聞きに来た僕たち。司祭にも魔界への行き方はわからないそうだが、大学の豊富な情報を使って、直ちに調べてもらえることとなった。

それから、大学の学長でもある司祭に、在学中のバイバルスの様子についても聞くことができた。

「……バイバルスは非常に優秀な学生でした。いつも陛下と首位を争っていましたよ」

司祭はそこで顔を曇らせた。

「テラスティアに、大変な憧れを持っていたようです。今考えれば、強大な力を手に入れたがっていたのかもしれない」

その時、外で騒ぎが起こった。先ほど僕たちを案内した神官が、慌てて部屋に駆け込んできた。

「何事だ？」

「魔物の襲撃です！ 街に魔物が二匹現れました！」

一同は色めきたった。司祭はリユクルゴス隊長を見て言った。

「貴方は討伐隊長でしたね。魔物を退治していただけなのでしょうか」

「ええ、もちろんです。しかし……」

リユクルゴス隊長は司祭をひとり残してよいものか、悩んでいるようだ。

「私なら大丈夫です。神官もおりますし。どうぞ皆さんで行ってください」

リユクルゴス隊長はしばし考え、部下を引き連れ外へと向かった。僕も一緒に戦いたかったので、それに続いた。

な、なんだこりゃ〜〜〜。

外に出ると、確かに魔物らしき生物が、猛威を奮っていた。しかし、その外見はなんと奇妙。

顔は人間の女のようなのだが、体は異様に細長く、ウロコがついていて、まるで蛇。しかもその蛇のような胴体からは、六本の人間の腕が生えていて、それぞれが曲がった剣を持っていた。体長は三メートルほど。

そんなやつが、二匹もいる。

「ほらほら、しっかりしろ。稽古の成果見せてくれよ！」

僕が圧倒されていると、リユクルゴス隊長がそう言った。

そ、そうだ！ 今度こそイイとこ見せなくっちゃ。震える手で貰った剣を握りしめ、僕はどうにかこうにか皆について行った。

第二十五話 情けない戦い

人間の女のような頭に、蛇の胴体。その胴体から多種多様な方向に突き出た、六本の腕。

異様な姿をした二匹の魔物は、それぞれの手に持った六本の剣を振り回し、まさに蛇のように体をくねらせながら、聖地と呼ぶにふさわしいこの荘厳な街並みの中を、舐めるように這いずり回っていた。

蠢く胴体が民家や神殿の外壁にぶつかると、鈍い衝撃音と共に柱が崩れ、建物の中からは悲痛な叫びが聞こえるのであった。

巢を追われたアリのように、点々と建物を飛び出してくる人間たちに、魔物は容赦なく剣を振るう。

しかし図体の大きな生物というのは、得てして俊敏とはいえないものだ。振り下ろされた剣の先が虚しく空を切ると、整然と敷き詰められた石畳の地面を割り、その先の土にまで深く突き刺さった。魔物はいかにも腹立たしげに、強引に剣を引き抜くと、次なる獲物を求めて這い回るのであった。

とはいえ人間たちもただ恐れおののき逃げ回っているわけではない。

ここはヒエラポリス。街の中心にそびえる大学には、将来士官になることを志す、武術の心得のある者が多数在籍している。我々討伐隊が到着する以前から、我こそはと思う者たちが、魔物に飛びかかり、剣を突き立て、魔法を浴びせ、それなりのダメージを与えていた。

そんな状況下で駆けつけた僕たち。街の外で待機していた討伐隊の仲間や、衛兵隊も合流し始めた。芥子粒のようにちっぽけな人間

といえども、これだけ集まればいかなる巨大な魔物でも太刀打ちできないだろう。

僕は人の波に揉まれないうち注意しながら、勇気を振り絞り、素早くかつ慎重に標的に接近した。雑踏を掻き分けながら進むと、目の前に魔物の尻尾らしき部分が見えてきた。ウロコ一枚一枚が確認できるほどの距離だ。そのウロコは、又メツとしていて、妙な光沢を放っている。

僕は剣の柄に手をかけ、そのまま勢いよく剣を抜いた。シリアに貫った短剣とは、長さも重さも段違い。自らの体格に対し大きすぎる剣に戸惑いつつ、全ての刀身を抜き放つと、シャン、と金属のこすれる音がした。

さあ、いよいよ剣を使う時が来たんだ。

周囲のざわめきが、背景のコマのように静かになった。まるでこの世界に、僕と魔物しか存在しないみたいだ。汗ばむ手で滑りそうになりながら、思い切り剣を振り上げる。

そうして、剣を振り下ろそうとしたその瞬間。

視界がぐるりと回転したかと思うと、みるみる世界が横倒しになっていった。静まり返っていた　ように感じた　雑踏の音が、突然に音量を増した。

目の前を目まぐるしく通り過ぎるのは、人の足？

「大丈夫か!？」

隣で魔物と格闘していた一人の兵士に、腕をグイと引き上げられた。しばらくわけがわからずに、茫然としていた僕だったが、ようやく理解した。

どうやら僕がチンタラ剣を構えている間に、魔物が自らの尾を振り回し、僕はそれに弾き飛ばされたいらしい。そういえば倒れる直前、一瞬目の前を巨大なウロコをついた胴体が横切ったような。いつの

間にやら魔物が体の向きを変えている。

怪我をしたかもしれない！ 慌ててシャツをめくると、脇腹に大きなアザができていた。さっきまで痛みなんか感じていなかったくせに、アザに気付いた途端、脇腹がひりひりと痛みだした。

僕を助け起こした兵士はこつちを振り向きもせず、苛立たしげに言った。

「もういいから。下がってる！」

そ、そんな。ここまできて、そりゃないよ。

戦う意志を見せようと、懲りずに剣を構えようとしたら、手の中に剣がなかった。もちろん腰に差さっているわけでもない。弾き飛ばされた拍子に剣はどこかへフツ飛んでしまったようだ。この雑踏の中で見つけられるとも思えなかったので、僕は大人しく引き下がるしかなかった。

あーあ……まーたいいとこなしだな。一朝一夕に剣の達人にはなれないみたいだ。

司祭のいる神殿に戻つてると言われたので、僕は雑踏を掻き分けつつ、元来た道をのろのろと引き返さなければならなかった。

第二十六話 不穏な気配

僕は再び司祭のいる神殿に向かって歩いていった。

周囲の建物の破損具合が、魔物の力の凄まじさを物語っている。柱がなぎ倒され、屋根の落ちた神殿。壁が破壊され、居間がむき出しになってしまった民家。

建物の中にいた人々はどこへ行ったのだろうか。上手く逃げ延びたのかもしれないし、打ち砕かれた壁や柱の餌食になったのかもしれない。なかった。

死体を見ることはなかったが、魔物と格闘する兵士に紛れて、怪我人を担架で運ぶ兵士の姿があった。

大きな街は幸いだ。あのワイバーンに襲われた村は、このような手厚い保護を受けることができなかったのだから。

目の前に広がる悲惨な光景と、人々の異様な熱気に眩暈がした。早く神殿に戻りたかった。脇腹が痛むせいかもしれない。さっきまでの意気込みが嘘のように、僕の気は縮んでしまったのだ。

魔物は街の入り口から大通りに沿って、街の中心部あたりにまで達していた。大通り付近の建物は無残に破壊されていたが、幸い司祭のいる神殿は街の中でも最深部の、小高い丘の上に位置している。空を飛ぶ魔物でなければ、あの雑踏を飛び越えて襲うということはないだろう。

やや丘を登ったところで、下の街から歓声が響いた。

この丘から魔物のいる地点までは五百メートルほど離れているが、この街の建物は高くてもせいぜい三階建て、しかも魔物の襲撃により一部は破壊されていたので、建物が視界を遮ることはない。さら

に高低差のせいもあり、街の中心部をよく見渡すことができた。

見れば、ちょうど魔物の一体が倒されたところであった。

蛇のような胴体をした魔物は、その長い体を石畳の地面にくっつきと横たわらせていた。体をS字状にくねらせながら、しばらく痙攣していたかと思うと、次第にその動きは弱まっていた。

そうしてぴくりとも動かなくなった時、横たわった魔物の胴体に、一人の人間が勝ち誇ったようによじ上った。それを皮切りに次々と人々が上り始め、口々に雄叫びを上げる。

その叫びは、丘の上にまで響いてきた。人間の勝利にホツとする反面、自分があの場合にいないことが少し悔やまれる。とはいえ、今さら戻ろうという気にはなれなかった。

残るはもう一体。もう一体の魔物は倒された魔物と全く同じような外見をしていたが、この丘からはより離れた、つまり街の入り口側の方にいた。しかしその一体もすでに六本の腕が切り落とされ、倒されるのは時間の問題と思われた。安心して、僕は司祭のいる神殿を目指す。

魔物に弾き飛ばされた拍子に打った脇腹が、まだヒリヒリと痛む傾斜のある道を歩く時はなおさらだった。どうせ誰も見ていないのだし、僕は脇腹をかばいながら、ヒョコヒョコと妙な歩き方で坂を登っていった。

しばらく行くと、神殿の三角屋根が見えてきた。白大理石でできた柱の一本一本が、春の日差しを受けて輝いている。ここだけ見れば、まさに平和そのものだった。

重厚な装飾のついた扉を開け神殿に入ると、中は妙にひっそりとしていた。人の気配はおろか、話しひとつしない。いや、神殿なので静かなのは当たり前なのだが、神官の一人も見当たらないというのは、どうにもおかしい。

控えの間に行くと、ようやく神官らしき男を見つけることができた。フードを目深に被っているので顔は見えないが、ローブに描か

れた特殊な文様を見るに、先ほど僕らを案内した神官だろう。彼は僕に気がつかないまま、奥の部屋へと消えていった。奥は司祭のいる部屋だ。

その時、僕はひどく違和感を覚えた。

彼の歩き方はどこか変だったのだ。僕がさっきやっていたように、腹部を押さえながら、妙な足取りで歩いていった。そう、まるで、腹に怪我でもしているかのように。始め僕たちを司祭の部屋へ案内した時、神官はそのような歩き方をしていただろうか？

目深に被ったフードに、腹部の怪我……。僕は嫌な予感がした。

第二十七話 失われた希望

どうか思い過ごしてあつてほしい。

そう願いつつ、僕は疑惑の神官が消えた方向へと急いだ。

もしもあのローブの男がバイバルスだとしたら、一刻の猶予もない。僕はノックをする間もなく、神殿の中でも一際立派な扉を乱暴に開け、中に飛び込んだ。

一瞬、中には誰もいないのかと思った。

確かに、僕の目の高さには人はいなかった。円形の石造りの部屋には、壁に沿ってところ狭しと本棚が並べられていて、部屋の中央には、分厚い本が乱雑に積まれた豪華な机が置かれていた。机の縁には金があしらわれ、眩しいほどに光っている。優美な曲線を描いた机の脚。そのラインを辿り、徐々に視線を下げると、僕の視界に恐ろしい光景が映った。

机の前に大きく横たわった物体。それは、血を流して倒れる司祭の姿だった。

緋色のローブの胸のあたりに、明らかに布地の赤とは異なるドロ黒い液体が染み出していた。

「あ……あ」

声にならない。足の力が急速に失われて、無意識のうちに尻もちをついた。歯の根がかみ合わずガチガチと音を立てている。次第に目の前が霞み始め、僕の意識は遠のこうとしていた。

しかしその時、視界の隅に僅かに動く司祭の口元を見つけて、僕は気を取り戻した。まだ息がある！

「司祭様！」

僕は震える足でよろけながら必死に立ち上がり、慌てて司祭に駆け寄った。仰向けに横たわった司祭の背に手を差し込み、抱きかか

えようとするが、支える力を失ったその体を僕一人の力で持ち上げることが不可能だった。

引き抜いた手に赤黒い液体がべったりと貼りつく。よく見れば、血で汚れたローブの胸元には、鋭利な刃物で差し抜かれたような跡があった。

司祭を貫いた凶器はおそらく胸から背にまで達したのだろう。背から溢れ出た血は白いタイル張りの床を真っ赤に染めていた。

全ての血液が流れ出てしまったかのように、蒼白な顔面。虚ろなその瞳はかろうじて開かれてはいるが、僕を見ているのか、いないのか。

僕は彼に一刻も早く手当てを受けさせてあげたかった。しかし、助けを呼びに行っていては間に合わない。その時、部屋のバルコニーに目が止まった。王宮にあったものと同じような窓のないバルコニーである。

バルコニーから叫べば外の人に気づいてもらえるかもしれない。そう思って立ち上がるうとした時、思いがけず強い力に引き戻された。

なんと司祭が、弱々しく投げ出されていたその手で僕の上着の裾をしつかりと掴んでいたのである。

彼の顔を見ると、目は光を取り戻しカツと見開かれていた。そして、口を何らかの発音の形に動かしているのが見て取れた。その口元は確かに何かを語ろうとしているのだ。

しかし、ヒューヒューと息が漏れるばかりで、声になっていない。「司祭様！ 司祭様！ しっかりして下さい！ 何を仰ろうとしているんですか！？」

口に耳をつけるようにして、必死に司祭の言わんとする言葉を掴もうとする。すると、その口元からかすかに声が漏れ始めた。

「魔界……かた……かりました」

「魔界！？ 魔界への行き方がわかったんですか！？」

僕の問いかけには答えず、司祭はなお声を絞り出す。

「プネ……マ……に……ぎよ、く……を」

司祭の声はかすれていて、上手く聞き取れない。

『プネ……マ』とはプネウマの鏡のことだろうか？ 『ぎよく』とは何だろうか？

司祭は辛そうに肩で息をする。せつかく光を取り戻した瞳が、今にも閉じられようとしていた。それに、急に力んだせいだろう。胸元のドス黒いシミの上に、新たに真っ赤な血が吹き出てきた。

もう見ていられなかった。やはり手当てを。バルコニーに向けて駆け出そうとするが、またも強い力に引き戻される。この状態で、どこからそんなに強い力が生み出されるのだろう。その瞳から光が失われつつあっても、僕を掴んだ手だけは絶対に放そうとはしない。

僕は悟った。彼は自らの死を覚悟しているのだろう。その前にどうしても彼の責任を果たしたいのだ。

必死に司祭の肩をゆすり、彼の目が閉じられるのを阻止する。

「お願いします！ もう少しだけ頑張ってください！ 『ぎよく』とは何ですか！？」

僕の言葉が届いたのか、彼は再び目を見開いた。

「ほ……ぎよく……」

「ほ……ぎよく？ 宝玉！？」

司祭は頷く代わりに大きく息を吸った。そして、今までで一番力強い声で言った。

「魔界の封印……解ける」

プネウマの鏡に宝玉を。魔界の封印が解ける。

これが司祭の伝えたかったことだろうか。これが、魔界への行き方だと。

「そうですね！？ 司祭様！」

もはや返事はなかった。そこまで言い終えた司祭は安心したように、静かに目を閉じた。

僕は司祭の体にすがりつき、必死に呼びかけ続けた。

しかし何度呼びかけても、どんなにゆすっても、閉じられた目が再び開かれることはなかった。

第二十八話 テラスティアの宝玉

司祭が 亡くなってしまった。

僕は司祭の体にすがりついたまま、少しも動くことができなかった。冷たくなっていく彼の体よりも早く、自分の体温が失われていく気がする。

外の人に知らせたり、司祭の残した言葉について考えたり。すべきことはたくさんあったはずだが、今の僕には何も考えられなかった。

涙は出ない。しかし指先の震えがずっと止まらなかった。悲しいのか、怖いのか、あるいは悔しいのか。自分でもわからなかった。

やがて、扉の向こうから複数の人の話し声と足音が聞こえた。リユクルゴス隊長たちが魔物を倒し終えて戻ってきたのだろう。声を聞いているだけで、興奮し顔を紅潮させた兵士たちの様子が容易に浮かぶ。

しかし今の僕にとって、浮かれた人々の会話など耳障りな音でしかなかった。

立ち上がらなければと思うが、体に力が入らない。

そのうちに、扉の向こうの足音が激しさを増した。声も先ほどのような浮かれたものではなく、不安に満ちたざわめきへと変わった。

やがて開け放したままの部屋の入り口に複数の人の気配を感じた。

おそろおそろ顔を上げると、やはりリユクルゴス隊長率いる討伐隊数名だった。彼らは司祭の亡骸にしがみついた僕を見て始めに「なんだかわからなかったようだが、その中の一人が思わぬことを口にした。」

「お、お前！ よくも司祭様を！」

僕の思考は完全に停止していたにも関わらず、その兵士の言わん

とすることを理解するのに長くはかからなかった。あまりの想定外の事態に、僕は驚愕して目を見開いた。

「ち、ちが……僕がやったんじゃ……」

何か言わなければいけないと思うのに、頭が混乱して言葉が出てこない。

「司祭様から離れる！」

本能的な力が働き、僕は慌てて司祭の体から飛びのいた。

ずっとしがみついていたせいで、僕のシャツは血で真っ赤に染まっていた。シャツの下の肌に、貼りつくようにじっとりと嫌な感触が伝わった。

部屋にたつた一人で、司祭の亡骸を目の前にして、シャツを血で染めた人間の話など誰が信じるだろう。

誤った方向に状況を理解した他の兵士たちもヒステリックに騒ぎ立て始めた。

まさかこんなことになるなんて！ 冷や汗が顔をつたい、目の前が真っ暗になった。

「いや、違うと思うぞ」

騒然となった室内に、リクルゴス隊長の低い声が響いた。さほど大きな声ではないのに、その貫禄のせいか、一気に部屋が静まり返る。

彼は無言のままつかつかと司祭の体に歩み寄ると、目線で床を示した。

相変わらず白タイルの床には真っ赤なシミが広がっている。リクルゴス隊長はそのまま視線を移動させた。

その視線の先を追うと、部屋を横切るように、司祭の体の下に広がるシミから点々と赤い液体が続いていることに気付いた。

そしてその行きつく先は……壁であった。

いかにもひんやりと冷たそうな、石造りの壁。周囲の壁には隙間なく本棚が並べられていたが、意識して見れば不自然なほどその壁

の部分だけぽつかりと開いていた。

血はそこで途切れている。

リュクルゴス隊長は血の跡をたどるように歩き、不審な壁に近づいた。そしてその壁を押した。

僕は息を呑んだ。石と石のこすれる音がしたかと思うと、壁の一角、扉一枚分ほどの大きさの区画が、まさに扉のように奥に向かって開いたのだ。いわゆる隠し扉というやつだ。

僕もその壁に近づき、扉の向こうを覗き込んだ。ひんやりとした空気が流れてくる。

暗くてよく見えないが、下向きの階段が続いているようだ。そしてその階段にもやはり赤い液体が点々と垂れていた。

リュクルゴス隊長はすぐに数名の兵士を調査に向かわせた。

「向こう側に取っ手はない。こちら側からしか開けられないようだな」

向こう側から開けるときは扉を引かなければならないのだから、取っ手がなければ開けることができない。リュクルゴス隊長が扉の反対側をさわり、取っ手がないことを示す。

まだ手の震えはおさまらなかったが、疑いが晴れたことで僕の頭は落ち着きを取り戻し、ようやく伝えるべきことを思い出した。

「怪しい神官が部屋に入るのを見ました。でも僕がこの部屋に入ったとき、すでにそいつはいなくなっていたんです」

僕は神殿に戻ってきた経緯、神殿に入った時の違和感、神官の妙な歩き方について話した。

「そうか……神官か……」

リュクルゴス隊長は目を閉じ、僕の話に苦渋に満ちた表情で聞いていた。それもそのはず、僕たちはまたしてもバイバルスにしてやられたのだ。

それも、まだ助かるかもしれないルイーズと違い、司祭の命は無残に奪われてしまった……。

なぜバイバルスは司祭を狙ったのだろう？ それを考えるうちに、僕は大事なことを思い出した。

「司祭様が亡くなる直前に、魔界への行き方を伝えてくれました」

プネウマの鏡に宝玉を。魔界の封印が解ける。

リユクルゴス隊長は宝玉という言葉聞き、はっとした表情になった。

「この言葉の意味がわかるんですか？」

「ああ。この国で『宝玉』といえば、テラスティアの宝玉しかありません」

この世界に来てから、『テラスティア』という言葉は何度か耳にしている。

テラスティアというのは、いつかシーアが話していた、かつてこの国を含め広大な土地を支配していた国だ。

リユクルゴス隊長によれば、テラスティア時代につくられた五つの宝玉というものがあるらしく、その宝玉をプネウマの鏡にかざすことによって魔界への扉が開かれるのでは、ということだった。

宝玉はテラスティア時代の神殿の遺跡に厳重に祀られているらしい。

リユクルゴス隊長は『厳重に』という部分を特に強調して言った。神殿の場所こそわかつてはいるが、その入り口は固く閉ざされ、今まで開かれたためしがないという。

要するにテラスティアの神殿の遺跡の中に宝玉がある、というのは伝説のようなもので、実際にそれを目にした者はいないのだ。

しかもテラスティアは現在の三か国にまたがる巨大な国であったので、その神殿もまた三か国のあちこちに点在している、と。

このアイオリアに二つ、東のアデイスという国に一つ、北のチュートニアという国に二つ。

それを集めるのに、どれくらいの間がかかるだろう。そして、いつになったら僕は元の世界に帰ることができるだろう。

僕は、愕然とした。

第二十九話 疑惑

リユクルゴス隊長の調査によって、司祭の部屋の隠し扉の先は街の外につながっていることが判明した。

後からわかったことだが、この神殿にはもともと有事に備えて直接街の外へと出られる隠し通路がつくられていたらしい。

それから神殿の一室に、神官全員が眠らされた状態で見つかった。そして思ったとおり、その内の一人は衣服を脱がされていた。

つまりこういうことだ。

司祭がすでに魔界への行き方を見つけたことを知っていたのかはわからないが、とにかくバイバルスは魔界への行き方がぼくたちに伝わるのを防ごうと思ったのだらう。

この街に魔物を呼び寄せ、ぼくたちの注意を引いている間に神官たちを眠らせ、そのうちの一人の衣服を剥ぎ取り、神官に変装して怪しまれずに司祭を殺そうとした。

計画は、一応成功した。バイバルスは司祭を殺した後、例の隠し扉から街の外に出た。

しかしぼくがバイバルスの予想よりも早く戻ってきたため、あるいは司祭の生命力が強かったため、真の目的は阻止することができた。

とはいえ、手放して喜べるはずもなかった。

この国に来て間もないぼくでさえ、司祭の死は心に深い影を落としたのだ。司祭を信頼し慕ってきたこの国の人々ならなおさらだらう。

リユクルゴス隊長含めぼくの周りにいる兵士たちみな、悲痛な面持ちで魂が抜けたようにぼんやりとしていた。

そんな抜け殻のような集団は今、都アエロポリスに向けて歩いて

いる。

なぜアエロポリスに戻るのだろうか？ 宝玉を集めに行くんじゃないのか？

ぼくは不思議に思ったが、その疑問に答えてくれる人は一人もいなかった。

「悪いなエンノイア、変なことに巻き込んで。あまり無理をするなよ」

いつものように優しい言葉をかけてくれたのはリユクルゴス隊長。ぼくは目いっぱい首を横に振った。

そういう彼のほうが、青ざめた顔をして、明らかに無理をしているからだ。

「無理なんかしてません。隊長さんこそ無理してるんじゃないですか？」

「あ……そうだな。正直言うと、ちょっときついんだ。いろいろとな……」

普段他人に心配されたりすることがないのだろう。彼は少し面食らったような顔をして、それから気弱そうに笑った。

都に戻る理由を知っている人がいるとすれば、それはリユクルゴス隊長とヴァシリス隊長だ。

司祭の遺体を処理した後、ぼくたちは数日間街の外のキャンプで待機していた。

その間に伝書鳩で今回の件のことを都に報告したようなのだが、都からの返事をたずさえて鳩が戻ったとき、ぼくはたまたま目撃してしまった。

悔しそうに涙を流すリユクルゴス隊長の姿を。あのヴァシリス隊長が、頭を抱え込み地面にがつくりと膝をつく姿を。

しかし彼らはその後理由を告げないまま、都に戻ることをだけのみ

んなに伝えた。

兵士たちはみな気力が殺がれていたから、誰もそのことに触れようとはしなかった。

あの絶望する様子を見ていたらとても本人たちに聞く気にはなれなかったし、副隊長のゾアでさえもその理由は知らないようだった。

そついうわけで、ぼくたちは今のろろと都へ引き返しているのだ。

都の方角に不吉な暗雲が立ち込めているように見えるのは、この国には珍しい曇り空のせいばかりではないだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9070v/>

aiolos

2012年1月4日01時49分発行